

2. 岩木川流域の河川

2. 岩木川流域の河川

1 概要

青森県西部に開ける津軽平野は、南西部の白神山地、南部の大鰐山地、南東部の八甲田山地及び矢捨山山地、津軽半島の津軽山地と中山山地、さらに、西方は岩木山、屏風山を含む砂丘台地など、四方を山地や台地に囲まれた肥沃な穀倉地帯です。

そのほぼ中央を流れる岩木川は、青森、秋田両県境の白神山地を水源として、途中四方の山地や台地から流れ出る数多くの諸支川を集めながら遠い昔から地域に住む人々に多大の恩恵を与え、時には奔流となり、あるいは清流となり、十三湖を経て日本海に注いでいます。

幹川流路延長102km、流域面積2,540km²は青森県内で最も大きい川です。

この流域には、現在3市11町10村がありますが、すべてが岩木川水系の豊かな水を頼りに開発を進め生活してきました。しかし、この川は、地形上上流部は急勾配で、下流平野部に入ると急に緩くなっているため、水害の多い川で、岩木川の歴史は、水害の歴史であったとも云えます。

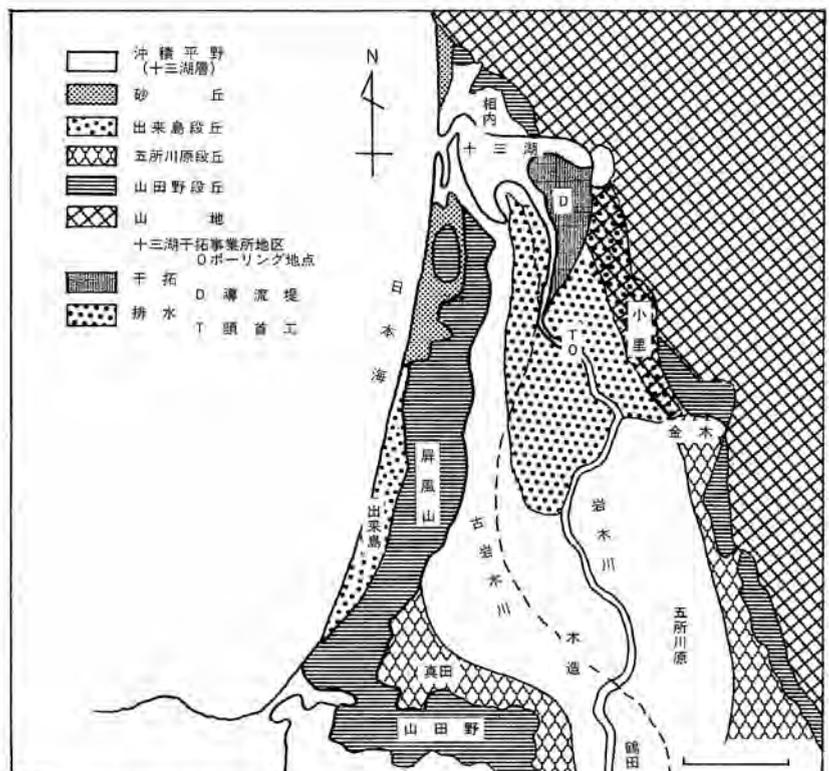
古い時代、岩木川水系の各河川は、洪水のたびに幾筋にも分れ、あるいは合して流れる流路が一定しない、いわゆる変流乱流河川でした。

今では、長い治水の歴史などからその痕跡の大半は残っていませんが、『岩木川物語』によると津軽藩政初期の岩木川は、真土（現岩木町）付近で二筋に分かれており、その一筋は現在の岩木川で、もう一筋は長勝寺の下から新町坂下流れ、弘前城本丸の西堀を通して富士見橋の下流で岩木川と合流していたとされています。（以前は、城北を流れ、瀬戸町を通して土淵川を入れ、さらに平川、浅瀬石川を別々に合わせ藤崎町白子で合流していたとの説もある）。

また、同書には、「岩木川は津軽藩以前は屈曲甚だしく、多数の派川は各方に流れていた様に想像される。鶴田町大字中野闇籠神社（元正観音）の縁起に『往昔相川の堤防破壊して田畑悉く荒廃す云々』とあり、この相川は、『板柳町大字飯田あたりから分かれて北東に奔り、赤田三千石に出で胡桃館に入り、さらに中野、山道の西を北進して十川を合わせて五所川原市南方にて本川と合した』と記されていますが、それは、図2-1によっても明らかです。

この図によると、合流点から木造方面を通り、旧出精村（現木造町）の西方を流れて田光沼近くで北東部に向かい車力村の東部から十三湖に注いでいるようになっています。

さらに、五所川原付近の十川についてみると、昔は、広田から猫淵（いずれも現五所川原市）の西方を流れ、湊村（五所川原市）の旧平山家（現在は重要文化財になっている）の前で岩木川に合流していました。（当時この地は船が往来し荷上げ場として河港の用をなしていたといわれています）



本図は、十三湖干拓事業所からの依頼により、東北大学教授理学博士小賀義男氏が、昭和37年調査発表された津軽低地帯周辺の地質並びに十三湖干拓事業所地区関係図である。

図2-1 古代岩木川幹川の流路図

しかし、この川は、正保2年（1645）から慶安2年（1649）にかけて、湊村派立（開墾）のため、同村から東方への堀替えや、その後も度々改修が行われています。



旧平山家

十川の支川、飯詰川も『岩木川物語』には、「昔、飯詰村より西方やや南寄りに流れて、五所川原松島地内の茅野原の沼沓地帯、俗称尻無に入っていたもので、何時の頃移されたか元禄時代の絵図には、毘沙門と、桜田の間に書かれており、これは三回目の飯詰川であるというが（中略）その頃は西方に流れて鶴ヶ岡字福田の鶴ヶ沓開墾地の中央を流れ藻川地内で岩木川に直接注入していたもので……」と書かれていますから、飯詰から尻無にいたり、鶴ヶ岡を経て、藻川において岩木川に合流していたこととなりますが、度々移動があったようです。（注 毘沙門、桜田…現五所川原市で現在の飯詰川の西方旧十川の東方に位置する。）

現在の流路は、文化2年（1819）其田弥太郎という人の開削によるものとされています。

また、金木川も、同町蒔田付近で、直接岩木川に合流していました。

これらはほんの一例で、改修以前の岩木川流域の河川は、右に曲り、左に折れるなど、勝手気ままに流れていたのです。

現在の流域を構成する河川のうち、幹川に次ぐ主な支川は、第一次支川の平川、新十川、旧十川、山田川。第二次支川は、浅瀬石川などがあります。

岩木川は、その位置から大別すると、平川・浅瀬石川の合流地点（三川合流点）から上流、三川合流点から五所川原、五所川原から十三湖。十三湖から日本海（水戸口）に分けられます。

さらに進んで、冷水岳付近から流れる大沢川を合流して目屋ダム貯水池に入り、湯の沢川を入れ、ダムによって水量を調節され、発電に利用されて目屋渓流を通り、平沢、大秋川、相馬川を合流して東方に進み平野部に入ります。

その後、岩木山麓を大きく北方向に転じながら弘前市街地の西部を流れ、藤崎町に至り、同町白子で平川を合流して水量を増しながらリング園の広がる平野を流下します。



暗門の滝



岩木川上流部（暗門川）



岩木川上流部（岩木橋付近）

② 岩木川上流域の支川

(イ) 暗門川

西・中両津軽郡界にある、標高600～800m級の四兵衛森・高倉森、八方ヶ岳、その他の山から流れる沢々の渓流を集めて、西目屋村川原平の西で岩木川本流大川に合流しています。

この一帯は、天然のブナ林が生い茂り、人手の入らない自然が残っています。妙師崎沢には、高さ73mの第一の滝をはじめとして、豪壮な滝が三段になって落下する有名な「暗門の滝」があり、整備された周辺の散策路を利用して、この大自然を満喫することができます。

(ロ) 大沢川

白神山地にその水源を発し、朝日股沢、西股沢などの諸溪流を集めて大沢川となります。北流しながら西目屋村川原平で岩木川本流に合流し、目屋ダム貯水池に流入している右支川です。

(ハ) 湯の沢川

大沢川東方白神山地の尻高森及び釣瓶峠より流れる尻高沢、その他の沢と西方の小湯沢、さらに、尾太岳、弁天森東方の諸溪流を集めて北に流れ、西目屋村砂子瀬で目屋ダム貯水池に流入している右支川です。

この川の中ほどには、津軽藩政初期から藩直営として栄えた尾太鉾山跡がありますが、この鉾山からは、銀や銅が採掘されていました。特に銀は、尾太銀と称され、藩の有力な財源になっていたといわれています。

(ニ) 平沢川

西目屋村と相馬村の境界、盆台森、掛鞍山などの諸溪流を集めて北に流れ、西目屋村壘平で岩木川に合流している右支川です。

(ホ) 大秋川

岩木町と西目屋村の境界、四兵衛森、桧森を水源として東に流れ、岩木山南斜面から流れる湯ノ沢、柴柄沢、毒蛇

沢を合わせ、弘前市国吉で岩木川に合流している左支川です。

途中には、鎌倉時代の年号が刻まれている古碑や古屋敷・堂の前などの旧地名が残っています。また、大秋の長七という金持ちが、小作人の娘を息子の嫁に迎えたが気に入らず、嫁いじめをした伝説や、寛政8年(1796)と同10年(1798)に、この地を訪れた紀行家菅江真澄が、危険な道路状況にキモを冷やしたといわれていることなどから、この川沿いは、古くから開けていたものと思います。

(ク) 相馬川

青森・秋田県境から流れる、諸溪流を集めた藍内川と、作沢川が、相馬村相馬で合流して相馬川となります。北に流れ、同村紙漉沢で岩木川に合流している右支川です。

この川沿いの藤沢に持寄城跡がありますが、元弘3年(1333)、鎌倉幕府(北条氏)の滅亡により、再興を期して鎌倉からのがれ来た幕府の重臣らが、秋田から津軽に入り、最後まで抵抗した歴史に残る「持寄城の戦い」があったところとされています。

(ク) 棚内川

相馬村山地部の諸沢々を集めて北に流れ、上岩木橋直上流で岩木川に合流する右支川です。

③ 平川

青森・秋田県境の柴森山(標高748m)を水源とし、(『岩木川物語』では甚吉森から発した湯ノ沢を水源としている。)炭塚森より北西流してきた遠部川を碓ヶ関村二ノ渡で合流して平川となります。

その後、左右から流入する大落前川・小落前川・相沢川・不動川・虹貝川・三ツ目内川・大和沢川・引座川・土淵川などの諸支川を合流し、さらに、十和田八幡平国立公園から流れる諸支川を集めた浅瀬石川を、藤崎町で合流し、同町白子で岩木川に合流している右支川です。

平川は、別の名を「堀越川」・「平賀川」・「石川」・上流を「碓ヶ関川」など、その地方の地名をつけた名称で親まれていたこともありますが、この呼び名が通用するのはその地区だけに限っていました。

また、この流域には、大鰐、碓ヶ関温泉など、古くから津軽の温泉地として知られている所があります。

④ 平川の支川

平川は、岩木川水系の中では、集水面積が一番大きく、そして最も多くの支川を持つ川で、そのうえ、そのほとんどが険しい山地を水源としています。このため一旦豪雨となれば急激に水量を増し、古くから岩木川本川に匹敵するような洪水がたびたび発生しています。

(イ) 小落前川、大落前川

両川とも右支川で、小落前川は、碓ヶ関村内の雨池森を水源として北西に流れ、碓ヶ関温泉南方の小落前で平川に合流しています。

大落前川は碓ヶ関村と、平賀町の境界に連なる標高800m級の山脈の南西斜面から流れ出ている小松原沢・コバリ沢・岩谷母沢・山椒倉沢などの溪流を集めて「白糸滝」を作り、碓ヶ関温泉直上流で平川に合流しています。

(ロ) 相沢川

碓ヶ関村と大鰐町との境界にある山地を水源として北東に流れ、JR「いかりがせき」駅の北で平川に合流している左支川です。

(ハ) 不動川

碓ヶ関村と平賀町との境界にある三ツ森を水源としているヒヤ水沢・王ホシ沢などが、同じ町村界にある白手山から流れ出たスリハチ沢・キクラ沢などの諸溪流を集めて不動川となり、さらに北西に進んで、碓ヶ関村古懸で平川に合流している右支川です。

(ニ) 虹貝川

青森・秋田県境の万左衛門山を水源として北に流れて早瀬野ダムに入り、途中、濁山から流れ出た砥沢・オローム沢を入れた後、大鰐町早瀬野で、大日影山・甚吉森の諸沢々を集めた島田川を合流して、同町川辺で平川に合流している左支川です。

この川沿いには、鎌倉時代に部落が点在していたと伝えられています。谷沿いの少しばかりの田畑を開きながら、主に山林で生計を立てていました。昔は、切り出した木材を、春の増水を利用して川流しをしたといわれています。



平川・浅瀬石川合流点

(ハ) 三ツ目内川

青森・秋田県境の三ツ森を水源として流れ出る西マタ沢・東マタ沢などの溪流が一緒になって北に流れ、同じく県境の孫左衛門山から流れて来た赤根沢を入れて、さらに、大鰐町居土で、折紙川を合流し同町森山に至って、平川に合流している左支川です。

(ヘ) 大和沢川

弘前市と大鰐町との境界にある西股山から流れる滝ノ沢・小倉沢などの溪流を水源として、途中、青森・秋田県境から流れ出た沢々や、弘前市と相馬村の境界から流れる多多良沢・板屋沢、石倉沢などの沢々、そして八幡岳から流れる子子タキ沢・スワ沢などの各溪流を集めて北に流れ、さらに毛無山から流れる尾神沢・深山沢・天王沢を合流して弘前市南東部の新興住宅街を流れ、同市川合で平川に合流している左支川です。

この川は、慶安年代(1648~1651)には、「門家川」と呼ばれ、その広さは6間(10.8m)、深さは1尺(30cm)と記録にあります。この川は春の雪解け時や大雨のときは別として、夏には水のない川として知られていますが、昔の大和沢川は流れが一定しない荒れ川で、度々大きな水害が発生していました。

(ト) 引座川

平賀町新屋の遠手沢を水源としています。西に流れ、途中で広船川、浅井川を合流し、扇状地性の台地を深く侵食しながら、尾上町と平賀町の境界として西に進み、平賀町杉館で六羽川を入れた後平川に合流する右支川です。

支川の六羽川は、平川から出て平川に入る珍しい川で、大鰐町鯖石から分かれて平賀町の柏木町大光寺などを通り、同町杉館で引座川に合流して平川に還るのです。

この川は、一帯の穀倉地を育て、天明・天保の飢饉にも餓死者が出なかったと言われていました。それだけに干ばつの年は、争いが深刻で、県下に知られた水けんかが幾度もありました。

また、天正7年(1579)津軽統一を進める為信軍が、この六羽川をはさんで、南部軍と対峙した世にいう「六羽川の戦い」があった所です。

(チ) 土淵川

弘前市の南西にあって、津軽三十三観音の第一番札所として知られている久渡寺山を水源として北東に進み、同市中心街を経て、同市大久保で平川に合流している左支川です。

昔、岩木川が、弘前市茂森町の西裏に出て弘前城の西端に沿い、同市紺屋町から城北を廻って流れていた時代には、土淵川も大きな川で、文化年代(1804~)までは、十三湖からの川船が往来していたともいわれ、弘前の人々の生活に、さまざまな影響を与えていました。

また、清流だった頃の土淵川は、弘前市の中心部を流れているため、夏になると子供達が水遊びをしたり、魚をとったり、あるいは洗たくをしたりして市民に親しまれていました。

戦前の土淵川には、大きな水害は発生していませんが、戦後の昭和33年8月、9月の水害及び昭和50年8月、52年8月に発生した大水害は記憶に新しいところです。

(リ) 浅瀬石川

この川は「汗石川」・「黒石川」とも呼ばれ、岩木川水系の中では平川に次ぐ流域面積をもつ川で、南八甲田の櫛ヶ峰(1,516m)を水源としています。この山から流れる滝ノ股川と、十和田湖畔の御鼻部山から流れる寒川や、元山峠・岩岳から流れる温川などが合流して浅瀬石川となります。



平川・浅瀬石川合流点下流



浅瀬石川

さらに下って、左南方から流れて来た摺毛沢・切明川を入れて北西方向に流れを変えながら、左南方からの小国川、右東方からの青荷川、さらに左南方から流れる深川、梨木沢、右東方から流れる二庄内川と次々に合流して、浅瀬石川ダム貯水池に入ります。ダムにより流量が調節され、発電、灌漑、上水道など、多目的に利用された後、両岸にホテルや旅館の建ち並ぶ温泉街を貫流し、右東方の横岳から流れる中野川を合流して西方向に流れを変え、黒石市街地南方を通り、藤崎町で平川に合流する右支川です。

南八甲田連峰の1,000~1,500m級の山々を水源とし、流域の大部分を山地で占めているため、四季を通じて水量は

豊かです。この豊かな水は、古くから水田の灌漑用水として利用され、県内でも有数の穀倉地帯を育てる源となってきました。しかし、耕地の拡大に伴い、灌漑用水の需要が増え、加えて森林の伐採が進んだので、夏になるとしばしば水不足が生じ、用水の奪い合いがありました。「水ケンカ」は、浅瀬石川名物の一つでもあったといわれています。

また、高い山々から出る溪流は、中野もみじ山など、数々の景勝地を作っているほか、川沿いにある多くの温泉は、黒石温泉郷としてよく知られていますが、その中にある歌人、丹羽洋岳が開いたといわれる山深いランプの湯宿青荷温泉は、特に旅情を誘う所です。

この流域の歴史は古く、下流の藤崎は、津軽の政治・経済・文化の中心地であったといわれています。

平安時代の末期、前九年の役(1051～1062)に敗れた安倍貞任の二男、高星丸が藤崎にのがれ、長じて安東氏を興し、鎌倉時代から室町時代にかけての藤崎は、岩木川下流部の十三湊と並んで隆盛を極めたと伝えられています。しかし、室町時代の応永25年(1418)南部守行によって攻め滅ぼされ、南部氏が支配するようになりました。

また、織豊時代(安土桃山)の慶長2年(1597)には、津軽統一の野心にもえる津軽為信が、浅瀬石城主、千徳政氏を滅ぼしたことなど、数々の歴史物語があります。

流域の大部分が険しい山地部となっている浅瀬石川は、出水のスピードが早く古くからたびたび集中豪雨による水害が発生しています。

特に大きな災害をもたらした昭和50年8月と52年8月の大洪水は、記憶に新しいところです。



青荷温泉

2) 本川・平川～五所川原

岩木川本川と支川の平川及び浅瀬石川が合流する付近を三川合流点と呼んでいます。

急勾配で流下してきた岩木川は、この地点から1/700～1/4,100と勾配が急変して緩やかになり、リンゴ園と水田の広がる平野部を北流します。

① 後長根川

岩木山を水源として東側斜面を下り、岩木町葛原の西で浅井川を合流した後同町賀田に入り、津軽為信の居城であった大浦城跡あたりから、北東に進み、弘前市蒔苗を通り、同市中崎で土淵堰用水路を横断して同市三世寺で岩木川に合流している左支川です。

この川を、地元の年輩者の中には「うしろながね」と言わず「うしろながれ」と呼ぶ人もいます。語原ははっきりしませんが、「後流」としている記録もあります。

また、古くから水害が多発している川で、三世寺、中崎・小山などの下流部では、度々大きな被害をうけていました。

② 大蜂川

岩木山の東側山腹を水源とする血洗川、鶏川が、弘前市宮館付近で合流して大蜂川となります。さらに、同市前坂付近で多沢川を入れ、その後同市四ツ谷において新大蜂川と旧大蜂川の二川に分流されます。新大蜂川は、昭和40年度から昭和43年度にかけて開削された放水路で、山地部から流出する水を直接岩木川に放流しています。

放水路で分流された後の大蜂川は、旧大蜂川として残流域の流出水をうけ、弘前市小友付近で前范川、大石川を合流します。小友から下流は、昭和49年度から昭和59年度まで施工した旧大蜂川放水路で、同市上中畑で岩木川に放流しています。さらにこの放水路以降の旧大蜂川は、昭和59



岩木川・平川合流点(岩木川・平川)



岩木川・大蜂川合流点

年4月11日以降、「新和川」と名を変え、下中畑で岩木川に合流しています。

この川も、2つの放水路が開削される以前は、小河川ながら水害の多い川で、春の融雪期の洪水は年中行事で、大雨のときは岩木川本川から逆流氾濫する水害の常襲河川でした。

③ 大蜂川の支川

(イ) 多沢川

岩木山の東側を水源として弘前市弥生の南方から同市中別所の北方を通り、新大蜂川放水路に合流しています。

(ロ) 血洗川、鶏川

両川とも、岩木山東斜面を水源として、並行する形で東に流れ、弘前市折笠地区を経て、同市宮館地区へ入った後両川が一つになって新大蜂川放水路に合流しています。

「血洗川」、「鶏川」と云う呼び名は変わった呼び名ですが、いつごろからなのか、またその由来などについては定かではありません。

(ハ) 前菴川

この川も、岩木山の東斜面を水源として蛇行し、弘前市檜木で旧大蜂川に合流しています。

(ニ) 大石川

岩木山北方の赤倉沢を水源として、大石神社の南方を通り大石川となります。北方に流れながら弘前市小友の北方で旧大蜂川に合流しています。

④ 十川

黒石市の黒森山を水源とし、浅瀬石川及び岩木川本川と平行する形で田園地帯を北に流れています。途中、同市中十川で長谷沢を、また、同市二双子と飛内との間で高館川を合流し、なお北に進み、黒石市と常盤村の境界付近で本郷川と合流して西に流れます。

その後、板柳町・藤崎町・常盤村の3町村が境界を接する付近から北に流れを変え、浪岡川を合流、さらに進んで前田野目川を入れ、五所川原市不魚住で岩木川に合流しています。

この合流点から上流の約6km区間は、新たに開削した放水路で、これを新十川と呼び、放水路の開削により分断された地点の五所川原市姥菴から下流を旧十川と呼んでいます。



岩木川・新十川合流点

旧十川は、姥菴と同市湊付近で相原放水及び鶴田町からの各排水路を集めながら流下し、その後松野木川を入れて岩木川と並行する形で北に流れます。途中、津軽山地を水源とする飯詰川・小田川・金木川の諸川を合流して、金木町神原で岩木川に入っている右支川です。流域一帯は低地で勾配が緩く、また、川底が浅いうえに曲りくねっていたので、古くから春の融雪期や、大雨の度に水害が発生して地域の人々を悩ませてきました。

このようなことから歴代津軽藩主は、十川治水については、岩木川本川の治水とともに特に力を入れてきました。古くは、慶長14年(1609)「十川改修」という記録があります。

⑤ 十川の支川

(イ) 本郷川

浪岡町本郷の東端浅沢から流れる諸溪流を水源としています。北西に流れながら同町湯の沢付近で西に流れを変え、同町本郷で十川に合流している右支川です。

(ロ) 浪岡川

浪岡町の浪岡山・王余魚沢岳から流れた五郎右衛門沢は、南方から流れる水ヶ沢を加えて西の方向に流れ、早稲鮒川となり、その後同町王余魚沢で浪岡ダムの放水を入れて浪岡川となります。さらに、西に流れながら浪岡城跡付近で正平津川、同町中心で大釈迦川を合流して進み、板柳町滝井で十川に合流している右支川です。

昔この川は、「白銀川」と呼ばれていた時代がありました。川全体を言っているのではなく、常盤村富柳あたりから十川合流点までを言っていたのです。

また、この川の水と、水源である浪岡山の利権をめぐる、下流側の浪岡・女鹿沢・北中野の農民と、上流の王余魚沢地区の農民の間で、長い間争いがあったといわれています。

(ハ) 前田野目川

青森市と五所川原市の境界にある、津軽山地の馬ノ神山から流れる大滝、笹沢などを水源として南に流れ、五所川

原市前田野目で西に流れを変えながら同市高野新田の北方で十川に合流している右支川です。

(二) 松野木川

五所川原市若山の東方水無沢を水源として西に流れ、若山から南方に流れを変えた後、青坂沢や横水沢などを集めて西北西に進みながら天神川を合流して、津軽鉄道「とがわ駅」付近で旧十川に合流している右支川です。

(三) 飯詰川

青森市と五所川原市の境界にある、津軽山地の魔ノ岳から流れる坪毛沢は、左右からの諸溪流を集めて飯詰ダムに入ります。その後北方の諸沢々を集めて南流して来た大淵川を合流し、同市飯詰に至って急に北西に流れを変えながら同市毘沙門を通り、金木町嘉瀬地区で旧十川に合流している右支川です。

この川沿いにある飯詰は、津軽北部の古い城下町で、津軽為信が津軽統一の最後の「とりで」、朝日氏の居城高楯城のあった所です。

また、飯詰ダムが出来る前の飯詰川は、水害が多い暴れ川でした。

(四) 小田川

青森市と五所川原市の境界、津軽山地から流れる大川目沢は、源八森から流れる九兵衛沢、金兵衛沢・猫右衛門沢・曲師沢・多多良沢などの溪流を集めて小田川となります。小田川ダムを経て西へ流れ、金木町嘉瀬の北方を通り、旧十川に合流している右支川です。

小田川の水は、藩政時代から開かれた金木新田の喜良市、嘉瀬地区の水田灌既に利用されてきました。現在は、上流に建設された小田川ダムより金木町をはじめ、近隣の中里町、五所川原市にまたがる水田を潤しています。

(五) 金木川

青森市と五所川原市との境界、津軽山地の大倉岳から流れる大倉沢は、袴腰岳から流れる敷場沢・湯ノ沢などの溪流を集めて金木川となります。その後、南方に進み、十二岳から流れる天櫃沢及びその南方からの大判沢・木違沢・常家戸沢などを合わせ、さらに下流で高橋沢を合流して金木町に至り、同町蒔田で旧十川に合流している右支川です。

昔の金木川は、蒔田地内で大きく屈曲していた岩木川に直接合流していましたが、昭和初期の改修工事でその曲がり直されたため、残されて旧十川に編入された部分に合流する形となっています。

津軽山地から伐り出されたヒバ材は、この川を利用して流送され、金木に集積していました。藩中で使用するヒバ材は、加工されて蒔田から船積みされたといわれています。

また、この川も水害が多く、岩木川との合流点では、岩木川からの逆流もあって部落が移転したこともありました。近年では、昭和58年8月の大洪水があります。

3) 五所川原～十三湖

この区間の平地部は三角州性の低地で、河川勾配が1/4,100～1/5,800と緩く、標高5m以下の低湿地帯が広がっています。西方には、屏風山系の砂丘地と、岩木川に並行して流れる山田川や、低湿地帯を流れる排水路があります。東方には、津軽山地からの諸川を集めて合流している旧十川があります。(旧十川については、前記)また、同山地を水源として流れ出て、平野部に至ってからは低湿帯の排水路を兼ねており、標高が低く、かつ勾配が緩いために岩木川と並流している河川が多いのが特徴です。

このように河川勾配が緩くなっているため洪水時は、流下する時間が長く、岩木川本川や十三湖の水位上昇が各河川に逆流して度々水害が発生しています。

4) 十三湖

岩木川水系の諸河川は、岩木川本川を含めてすべてが一旦十三湖に入り、その後水戸口河口を経て日本海に注いでいます。

昔の十三湖は、陸奥湾に匹敵するほどの大きな入江でした。江戸時代初期には、五所川原市藻川あたりまで湖沼であったといわれています。しかし、この広大な十三湖も、地形的な大変動や岩木川から流入する土砂によって次第にせばめられてきました。

明治初期の記録によると、その面積は4,882町歩(4,882



岩木川河口部

表2-1 十三湖面積推移表

年代	湖面面積	減少率(%)
明治初期	4,882町歩	
明治35年	3,740	23.4
大正元年	2,155	55.9
昭和35年	2,074	57.5

ha)もありましたが、同35年には3,740町歩(3,740ha)に、大正元年には、2,155町歩(2,155ha)となり、さらに昭和35年の調査では2,074町歩(2,074ha)と、明治初期からでも約2,800町歩(2,800ha)も減少されたこととなります。

十三湖は、治水上の働きとして、十三湖に流入する岩木川の洪水量と、流出口としての水戸口における洪水疎通能力との流量差について、そのバランスをとる調節地としての大きな役割を果たしています。

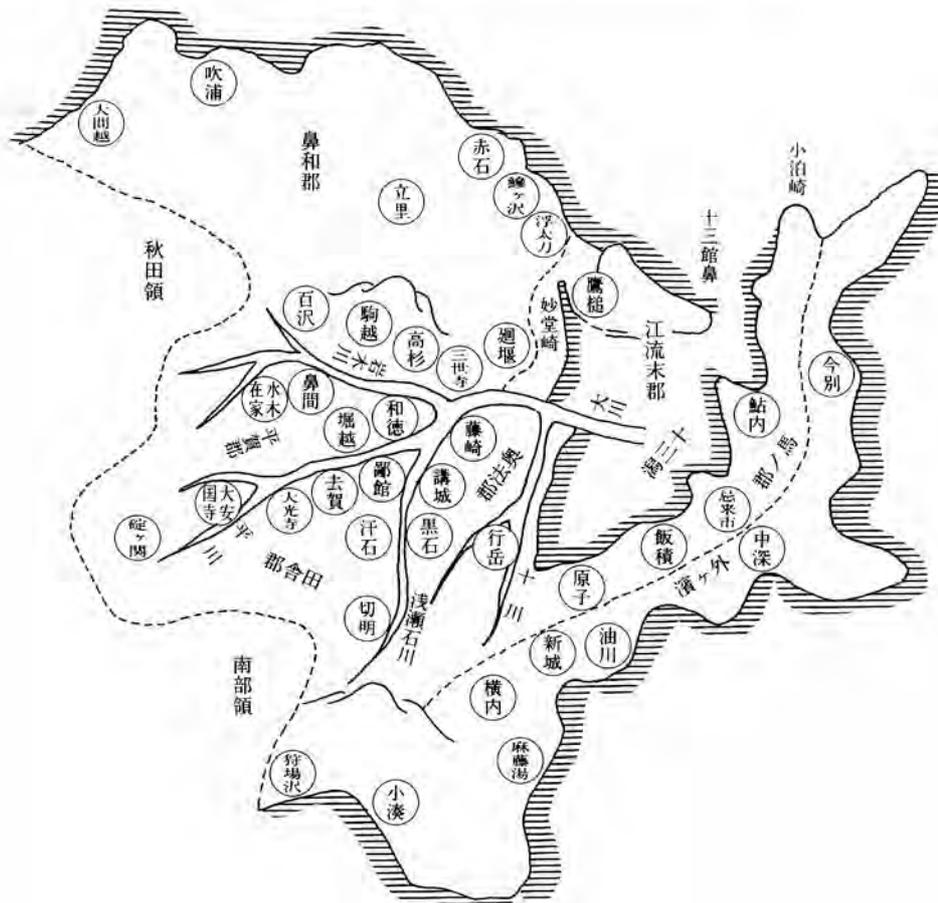


図2-3 津軽六郡の図に描かれている十三湖

この周辺には、古くから人間が住んでいました。現在確認されている多くの遺跡がそれを物語っています。

日本海の波しぶきで、さびれた感じの「カッチョ」が立ち並ぶ十三も、かつてはこの地方一帯に勢力を張っていた安東氏の根拠地として繁栄をきわめていました。

鎌倉時代には、「十三湊」といわれた全国でも有数な港町の一つで、「夷船京船群集し、艫先を並べ舳を整え、湊は市をなす。」と、活気に満ちあふれていたといえます。

しかし、興国元年(1340)の大津波で、十三の町は一瞬のうちに壊滅状態になり、岩木川流域で死者10万人と伝えられています。安東氏はその財力をもって復興に取りかかりましたが、平成2年以來8年間にわたる県教委と村教委の共同発掘調査で、14世紀末から15世紀初めにかけての大きな遺構が発見され、大規模な都市造りが行われたことが判明しました。

また、為信が津軽を統一するまでは幾たびか支配者の交替がありました。今、静かなたたずまいを見せる十三湖には、これら栄枯盛衰の物語が秘められているような気がします。

① 十三湖に流入している河川

- (イ) 山田川



数々の歴史を秘める十三湖の夕暮れ

岩木山中の北側にある、扇ノ金目山を水源とした長前川は、同山腹を流下した飛子川とともに西津軽郡森田地内の小戸六ダムに入ります。その後、小戸六ため池、狄ヶ館ため池を経て、新山田川として整備された流路を古山田川と並流し、木造新田地方の各放排水路を合流しながら出精川、出崎放水とともに田光沼に入ります。田光沼を出た山田川は、東方の岩木川と並行した形で流れ、さらに周辺の排水を集めて十三湖に入っています。



山田川の流域

この川の支川出精川は、一見自然河川のように見えますが、人工河川です。弘前市船水地内の岩木川左岸から取水し、弘前市・鶴田町・柏村などの水田を潤している土淵堰が、柏村上古川地区で出精川とその名を変えたもので、以降、木造町・稲垣村を通して田光沼に入っています。

山田川流域は、藩政時代から木造新田として開発が進められた広大な水田地帯となっています。しかし、低平地であるため、十三湖の水位上昇による逆流や、塩水に悩まされてきました。かつて下流部の水田は、腰までめり込むことから「腰切田」と呼ばれていましたが、河川改修が進んだことにより乾田化され、今ではこのような状態は解消されています。

(ロ) 鳥谷川

金木町地内の藤枝ため池から出た流れが、金木町・中里町の水田排水を集めながら、東方津軽山地の、横岳を水源として流れる宮野沢川を合流した中里川と、さらに下流で中里町尾別の一ヶ岳を水源として西に流れる尾別川を合流して十三湖に入っています。

(ハ) 薄市川

津軽山地の玉清水山から流れる相ノ股沢が、北方より南流する母沢を合流し、さらに、南方より西に流れる中ノ股沢・田ノ沢を合流して中里町薄市に至ります。その後約1kmほど鳥谷川と並流しながら河口付近で鳥谷川と合流する形で十三湖に入っています。

(ニ) 今泉川

中山山地の東・北両津軽郡界から南方に流れて早池沢・柏木沢を合流し、さらに南方より流れて来た鍋越沢を合流して南西に曲がり、その後、北方から流れる湯ノ沢・切明沢を合わせて中里町今泉において十三湖に入っています。

(ホ) 相内川

中山山地の四ツ滝山、木無岳から出る諸溪流を集めて太田川となり、南方向から西方向に流れを変えながら、市浦村太田で、南流する長根沢を合流して相内川となります。さらに下って、同村相内の東方で、南流する桂川・山王坊川を合流して十三湖に入っています。

現在の相内という地名は、昔「鮎内」と呼ばれ、相内川は「鮎打川」だったといわれています。

かつて十三が栄えていたころは、奥地で伐り出されたヒバ材が、この川を利用して流送されていました。

また、この地区は、福島・唐川城跡をはじめ、神社・寺院跡など、十三が北国第一の港町として栄えたころの史跡が数多くあります。



福島城本丸跡
(市浦村ミニガイドBOOK『しうら』より)



日吉神社の二重鳥居
(十三繁栄のなごりと歴史をとどめる)

5) 水戸口 (河口)

流域の各河川から集められた岩木川の水は、最終的には水戸口を通過して日本海に注ぎます。改修以前の水戸口は、日本海からの強い西北西の風によって吹き寄せられた砂で幾度も閉塞をしました。そのため、行きどころがなくなった湖水は、広い範囲にわたってあふれ、新田開発や、十三村の発展に大きな影響を与えていました。

このため、藩政時代には、度々開削工事が行われましたが、当時の土木技術では解決するに至りませんでした。その痕跡は現在でも数ヶ所に残っています。

大正14年に、内務省直轄事業として現水戸口開削工事が開始され、昭和22年に完成しましたが、それ以来、閉塞することはなく、河口処理工事としては、全国でも数少ない成功事例となっています。



十三湖水戸口

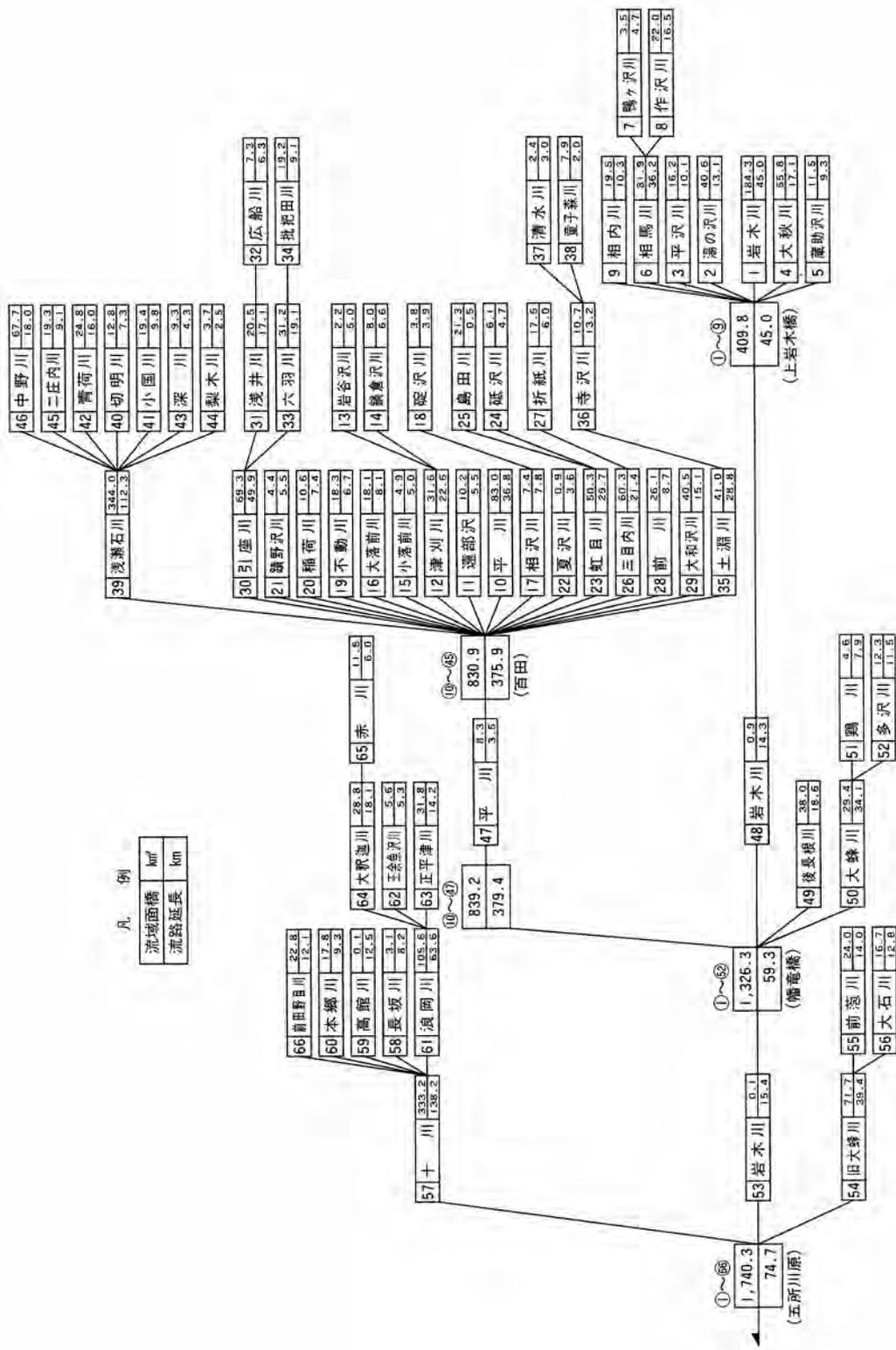


図 2-4 岩木川水系構図 (1/2)

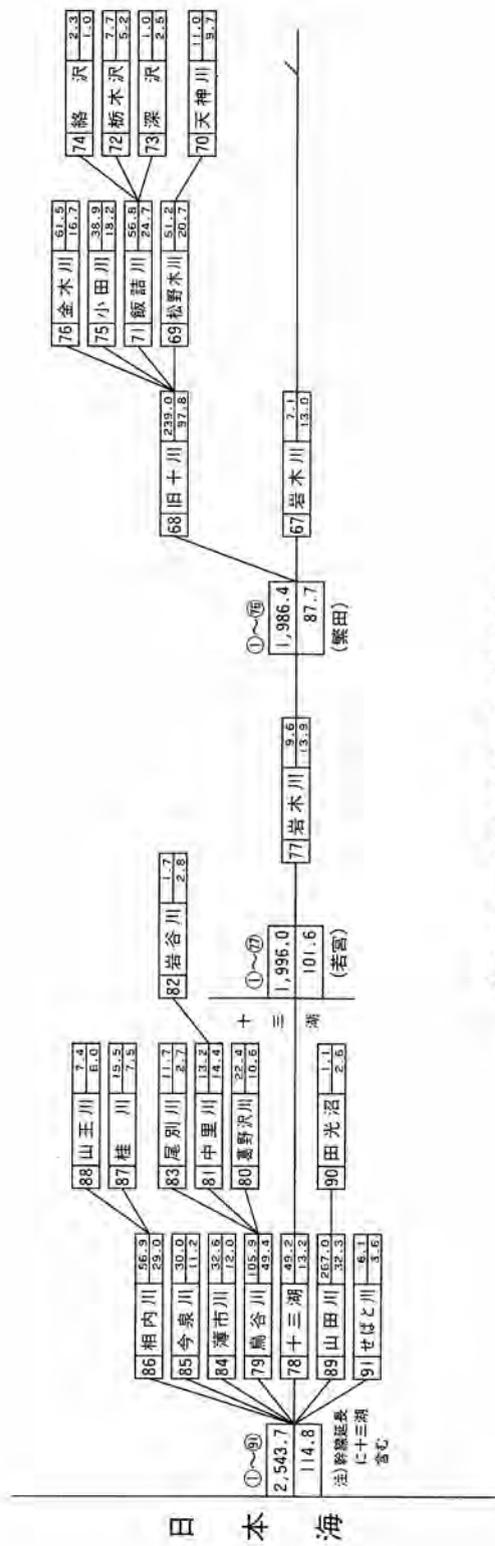


图 2—4 岩木川水系構図 (2/2)

3 川にまつわる言葉

1) 川にまつわる言葉

① 一本タモ (稲垣村)

稲垣村豊川地区の岩木川堤防沿いに、樹齢500年前後といわれる「ヤチタモ」の大木があります。

昔の岩木川下流地方は、広大な湿原地帯でしたが、歴代の津軽藩主によって新田開発が進められてきました。

開発の調査をするには、何か目印になるものが必要であったし、また、当時の岩木川は、船の往来が盛んであったので川沿いに立っているこの「一本タモ」は、目標としても利用されていたものと思います。

岩木川改修工事の際、この木を切って堤防を真っすぐにしようとしたこともありましたが、「神樹」といわれているこの木を伐採する人がいなかったため、そのまま残ったとされています。

② 嘉瀬と金木の間の川コ (金木町)

今の世の中逆さまで

嘉瀬と金木の間の川コ

石コ流れて、木の葉コ沈む

と歌われているこの川は、金木町を流れている小田川だといわれています。

これは、津軽藩政期の新田開拓当時に、この地方の開拓吏として苦労していた藩士が、上納米の取り立てに赴いてきたかつての同僚であった藩役人に辱められたので、下男が主人を慰めるため即興で歌ったのが始まりといわれています。「誠実な者は恵まれず、悪賢い者がはびこる」という矛盾した世の中を風刺した歌だといわれ、この歌に合わせて踊る「嘉瀬の奴踊り」は有名ですが、これは秋の豊作を祈願する田植え踊りでもあります。

③ 長富ため池の浮島 (五所川原市)

津軽藩は、新田開発を進めるため各地に用水確保のため池を築造しました。

金木新田地方にも、長富の二ノ沢ため池、嘉瀬の清久ため池、金木の藤枝ため池、大沢内のため池、高根のため池など、たくさん築造されましたがどれも当時としては大仕事でした。また、苦心の末出来上っても、大雨や波浪にたかかれて決壊することもしばしばで、その度に農民たちは大変な難儀をしていました。

そのころ長富村開村の役にあった藩士が、一策を講じて柴を切り出し、藤づるで編ませ、これをため池の水面に浮かべたところ、大変効果があり、どんな強風、波浪にも破堤がなかったといわれ、長富ため池の浮島はその名残りで、長い間にいろいろな雑草の実が張り、やがて歳月を経て浮島を造っていったといわれています。

今は「津軽じょんがら節」にもこのことが歌われています。

さても不思議な長富ため池

池の真ん中サ、浮き島あって

風の吹くたび、ヤレ西東

④ 黒石のじょんがら節 (黒石市)

津軽地方には、数々の民謡がありますが、浅瀬石川流域で最も歌われ、親しまれている歌に、「黒石じょんがら節」があります。

国は津軽の岩木の河原
三日続きの大雨降りで
その夜、雨にて大川にごる
国の殿様馬に乗りかけて
河原近くにお出ましなさる
里の娘は大根洗う

それ見てとる馬上の殿は
無理な難題娘にかけた
そこで娘の言うこときけば
国の殿様なに言わしゃんす
川がせまいたて後ばねできぬ
石コ小さくたて齒コたつもだな

そこの道理を良く聞き分けて
おらが領分よく見てまわれ
水の出ないように百姓まもれ

この歌は、黒石の殿様と農民のかけ合いですが、この歌の中でも「水の出ないよに 百姓まもれ」と、水害に悩む農民の訴えがこめられているとおり、この地域にとって、治水・利水がどんなに切実な願いであったかがうかがわれます。

⑤ 水けんかは雨でなおる

水での争いごとは、雨が降ると仲直りするというので、両者に争いの種がなくなると、争いは収まるとの意味です。



一本タモ

⑥ サケの厚い年は、実りが悪い

サケが川を多く上る年は、稲は不作という意味です。サケは水温が冷たく、低い年には、たくさんそ上するといわれますが、水温の低さが気温の低さに連なるためと思います。

⑦ 淵さ糠

淵に米糠を入れるようなもので、幾ら入れても、際限なく、無駄であることに例えられます。

⑧ カップの川流れ

泳ぎ上手なカップでも水に溺れることがあります。名人上手、といえども油断は禁物であるとの戒めです。

⑨ 一匹雑魚は一人で食うな

一人占めして満足することを戒めたものです。

昔、八郎という男がいて、ある日、川でイワナを捕えて一人で食った後、のどが乾いてたまらず、小川の水を飲み干して、ついに沼の主になった伝説によるものです。

⑩ ほまちこ

津軽地方では、へそくりのことを「ほまちこ」という。「ほまち」は津軽地方では良い意味で使われる。今でも使われている「ほまち仕事」は、本務が適宜区切りのついた時点で依頼されていたお願い事をしてあげる仕事の意味である。この地方の「ほまち」は舟運時代のなごりであり、ほまちは「帆待ち」を意味している。

藩政時代には、岩木川は舟運が盛んであり、板柳、藤崎まで舟が航行していた。岩木川には川湊が所々にあり、昭和30年代前半には、十三湖から五所川原あたりまで舟による交通があった。昔は動力がなかったため、帆で航行しており(P98写真参照)、風がないときは帆待ちといって風をまった。舟が帆を上げる時を待つ間、アルバイトして小遣いを稼いだことより、この臨時収入をほまちこと呼ぶようになった。ここから、津軽地方ではへそくりのことをほまちこ(帆待ち)と言うようになった。

⑪ ごじょ(郷蔵)

津軽地方では、「ごうぞう」を郷蔵と書き、「ごじょ」と呼んできた。凶作に備えて穀物を貯蔵する蔵のことを郷蔵という。以下P179参照

2) 川沿いに残る伝説

① 神の水(西目屋村)

西目屋村の名坪平に高さ約30mの乳穂ヶ滝があり、冬になると稲の乳穂に似た大小の氷柱が造形されます。大きい方をうる乳穂、小さい方をもち乳穂と呼んで、多くの参拝者が旧正月の17日に集まり、その形状などからその年の稲作を占う習慣があります。また、津軽の殿様の命によりこの氷柱を病人に与えたところ全快したという伝説から、この乳穂ヶ滝の氷柱は「神の水」とも呼ばれ、氷や滝の水を求める人も多かったといわれています。

② 郷坂滝(西目屋村)

岩木川上流支川大秋川沿いに、大秋という集落があります。その昔、この集落に村一番の大地主で庄屋をつとめていた長七という人がおりました。

その息子が年頃になったので、家柄相応の花嫁を迎えてやろうと探していました。ところが、息子には心に決めた小作人の娘がいたのです。これを知った長七は、頑固に反対しましたが、親戚などの説得でどうやら納得し嫁を迎えたものの、すること、なすことすべてが気に入らず嫁いじめをしました。これに耐え兼ねた嫁は、婚家を呪い、神様のお告げに従い、この家で大事にしていた大木の茂る木に登り、生卵に縫針をさして投げつけたところ突然大音響とともに大陥没が起き、白衣姿の嫁はそのまま天に昇りました。

今まで大秋川に流れていた沼頭川(郷坂沢川)が流れを変え、岩木川に入るようになったという。

郷坂の峡谷と郷坂滝は、このときできたといわれています。

③ 機織淵(相馬村)

相馬村の紙漉沢の近くに機織淵と呼ばれる淵があります。この淵は杭止の堰で尊い人柱となった羽黒神社主、川崎権太夫の娘が父の後を追って投身した所とされ、晴天の日には淵の底に娘が織った布が見えるといわれています。

④ 長慶天皇と紙漉沢(相馬村)

伝記によると南北朝時代、南朝第3代長慶天皇(1368~1384)が足利氏の追及をのがれ、みちのくに下り浪岡城の北畠氏を頼りましたが、さらに南部氏に追われようやく紙漉沢にたどりついたという。元中2年(1385)11月10日夜のことと伝えられています。



乳穂ヶ滝

紙漉沢は、天文年間（1532～1555）につくられた『津軽郡中名字』にも見えますが、長慶天皇にお供してきた高野山遍照院の僧正秀明長が、村の人たちに製紙の方法を教え自分もつくったのでこの地名ができたといわれています。ここでつくられた紙は、「野紙」と呼ばれていたそうです。

秀明はここで亡くなったといわれ、相馬川の橋の付近にある墓地のことを土地の人たちは、昔から長老墓と呼んでいます。

⑤ 御所と五所川原（相馬村・五所川原市）

五所川原市元町にある八幡宮の境内に、「五所川原地名発祥之源地」と書かれた石碑が立っています。

この神社は、以前もっと西寄り、つまり岩木川堤防の西側にありましたが、岩木川改修のため今の場所に移されたものです。

その昔、岩木川が洪水になった際、中津軽郡五所村（現相馬村五所）に祀られていた小祠（小さなお堂）が、御神体を安置したまま五所川原に流れつきました。

これを中川村新宮（現五所川原市）の人が拾い上げ、あまり立派なお堂なので新しい社殿を造り、このとき村名を新宮村と名づけ、うやまっていました。

その後、村人の協議によって流れついた場所に祀るのが道理だとして新宮村から移されたと伝えられています。

相馬村は、古くから長慶天皇に関する言い伝えがあり、「五所村」は昔「御所村」で、後に「五所」と改めたとされています。

五所川原の地名も「御所」に祀られていた小祠が流れついた川原、すなわち「御所川原」でしたが「御所」ではおそれおおいというので、後に五所川原にしたといわれています。

⑥ 鬼の掘った堰（弘前市）

弘前市鬼沢に鬼神社があり、農業の守護神として土地の人々の信仰を集めています。昔から赤倉には鬼が住んでいるといわれていました。ふもとの農民がこの地を開こうと荒地を耕していると、鬼のようなものが現われ手伝ってくれました。これはただの鬼ではないと、用水の必要なことを訴えました。

鬼は、手を貸してやろうといい姿を消しました。翌日、農民がその場所に行くと、地面が掘られ一筋の水が勢いよく流れていました。さっそく村人たちに知らせ、その水を使って開田しました。鬼が掘ったというのは、岩木山王余魚沢から逆堰と称する8kmに及ぶ灌漑水路で、岩を削り、石を砕いて通した跡がはっきり残っており、人間わざではない程の難工事であったところから鬼の伝説となったようです。

村人たちは、鬼に感謝するため神社を建て、村の名前を鬼沢としました。今の鬼神となったのは明治8年で、それまでは赤倉鬼神大権現と呼んでいました。

⑦ 歯塚（平賀町）

平田森の田の中には、歯もり、はしもり、剣もりという三つの塚がありました。これは、昔鬼を退治してその歯を埋め築いた塚だといわれています。日照りが続くと村人たちは、この塚から歯を掘り出し雨ごいをしたそうです。すると、必ず雨が降ったといわれています。

⑧ 片目の魚（尾上町）

猿賀神社の神様は、トコロのつるに足をとられ、倒れたはずみにウドの殻で目を突き片目になってしまいました。それ以来、境内の大池に片目の魚が見られるようになったといわれています。目の悪い人は境内のわき水で目を洗うとよいといわれ、眼病で猿賀様に願をかける人は神様の嫌うウドとトコロを食べないといわれています。

⑨ 美人川（浪岡町）

昔、近衛公の姫の福姫は、器量が良くないため縁談がなく、占いに問うと婿になる者は「みちのくの外ヶ浜にいる」とのことから、はるばる津軽まで旅をしてきました。浪岡の五本松近くまで来て、小川の水で顔を洗ったところ、水面に映った自分の顔は別人のような美人に変わっていました。以来、この川は美人川と呼ばれるようになったといわれています。

⑩ 唐糸御前の悲しい物語（藤崎町）

藤崎町の中心からやや北方に唐糸御前の古跡があります。古い時代の藤崎は、津軽地方の中心として栄えていました。鎌倉幕府の5代将軍北条時頼に唐糸という愛妾がおりました。この人は才色にすぐれ、時頼の寵愛を一身にうけていたため人の妬みをうけ、ついにこの地にのがれてきて、ひそかに暮らしていました。時がたち、出家した時頼は



五所川原八幡宮



全国行脚の旅に出て津軽を訪れました。田舎に落ちぶれ景色がおとろえた唐糸は、時頼と再会することをなげき、近くの池に身を投げ命を絶ったという。時頼はこれをあわれみ、お寺を建てねんごろに供養したと伝えられています。

⑪ 弘法サルケ（木造町）

雪の降る冬の中、諸国行脚中の弘法大師は、一軒の家に一夜の宿を請いました。しかし、その家は大変貧しい家で、炉に燃やすものもないありさまでした。その時弘法大師が与えたたき物がサルケであったといわれています。弘法大師が授けてくれたので、柴田部落のサルケは良質だと自慢の種になっていました。（注・サルケ…泥炭のこと、新田地方一帯の農家では、主にこれを燃料としていた。）

⑫ 田光沼の竜神様（車力村）

昔、十三湖に五ひきの竜がいて、いつもけんかをしていました。困った村人は、なんとかけんかをやめさせようと、一番大きな川を作った竜に娘をやることにしました。その結果、黒竜が娘をもらって田光沼の主になり、他の竜はどこかへ行ってしまいました。それ以来、村は平和になったということです。村人の川に対する願いを竜に見る思いがします。

⑬ 響き合う二つの鐘（市浦村・五所川原市）

享保元年(1716)、京都の三条釜座の名工、近藤丹羽勝久によって二つの鐘が铸造されました。一つは飯詰村（現五所川原市）の長円寺、もう一つは弘前の長勝寺に納められるものでした。長円寺の方が雄鐘・長勝寺の方は雌鐘として造られたといえます。二つの鐘は船で運ばれ十三湊に着きました。十三湖に入って間もなく暴風雨に遭い、船は転覆して二つの鐘は湖底に沈みました。

ようやく長円寺の鐘だけは引き上げられましたが、長勝寺の鐘はだめでした。長円寺の鐘は、つくたびに余韻をひいて、さながら湖中に沈んだ雌鐘を恋うように聞こえ、その響きにに応じてか湖中の鐘も波音とともにかすかな響きを立てて聞こえる、と古くから語り継がれてきました。

また、十三の方の伝説では、湖水の澄み渡った日など、漁師たちが湖底に鐘らしいものを見ることがあるといい、人の気配がすると鐘の中から魚のようなものが現れ、泥をかき立てて鐘を見えなくする、といわれています。

長円寺の鐘は、安政年間(1789～1800)に海岸防備の大砲を铸造のため、また、太平洋戦争のときも金属徴用として回収される運命にありました。

しかし、地域の人々の願いによりその難を免れました。今では、江戸中期における青森県唯一の梵鐘として青森県指定文化財（県重宝）となっています。

⑭ 大和沢川の伏流水

弘前市内を流れる大和沢川は、大和沢あたりから清水森まで地下にもぐり、伏流水になっているといわれますが、古い時代はそうでなく、流れの比較的ゆるやかな小栗山部落には、賃取り渡し船があったと伝えられています。

あるとき、身なりの貧しい旅の僧がこの渡し場に来て、対岸まで船に乗せてくれ、と頼みました。だが、船頭は断りました。身なりから金を持っていないとにらんだのです。僧は、あいにく古杖と、じゅうしか持っていないませんでした。

渡し場に残された僧は、なにやら唱えながら古杖を川の中に投げました。すると不思議なことにその瞬間から水が引いてしまい、僧は投げた古杖を拾って川を歩いて渡ったという。それ以来この地区の水は地下を流れるようになった、といわれています。



唐糸御前の古跡（『町勢要覧藤崎』より）



（五所川原市立南小学校 第19回卒業記念版画集「岩木川」より）



長円寺（飯詰）の梵鐘（県指定文化財）

旅の僧は弘法大師でした。

3) 川にまつわる地名

岩木川流域には、川にまつわる地名がいろいろありますが、その主なものを紹介します。

① 碓ヶ関(碓ヶ関村)

『地名の語源』では、イカリは「河岸段丘、山間の河盆のある地名」とされていますが、水流がイカル(埋まる、洪水)の意味もあることから、「洪水の起こりやすい所の関所」の意もあるといえます。

② 大鱈(大鱈町)

大鱈は、大合(おおあい)、大きな合流という意味で、この地で平川と虹貝川とが合流しています。その先には宿川原という地名もありますが、ここの川幅は最も縮まっているので「縮川原」であったともいわれています。

③ 堀越(弘前市)

中世において、大和沢川の流れを今の千年小学校のあたりから、平川に注ぐ川合(かわい)まで堀を掘って水を流し、その堀を越していくことから堀越と呼ばれているとされています。

④ 樋の口(弘前市)

樋の口は、岩木川の旧河川の床地で、岩木川の流れを城の西堀の方に引くために、樋の口(水門の口)が設けられたことから、樋の口と呼ばれています。

⑤ 青荷沢(黒石市)

青荷沢は「仰ぐ沢」「絶壁を背負った沢・ふり仰ぐほどの絶壁を背負った沢」の意味からついた地名ともされています。

4) 川名のルーツ

① 岩木川(いわきがわ)

「岩鬼川」の文字で書かれている古文書もみられます。「大川」または「古川」とも呼ばれていました。いうまでもなくこの川が津軽地方で最も大きな川であるため「大川」、最も古い川であるため「古川」と呼ばれるようになったと思います。当時の「岩木川」は、目屋川下流で「大川」と呼ばれていました。『岩木川物語』には「岩木川、下流を大川と称す」と明記した昭和5年度県統計書が紹介されています。このことから、その呼び名が古くからのものであることがうかがわれます。

② 大川(おおかわ)

岩木川の源流。最上流部は、この川と暗門川、大沢川の三つの流れが合していますが、本流であるから大川と呼んでいるものと思います。

③ 湯ノ沢川(ゆのさわがわ)

岩木川の支川。上流に温泉があるからと思います。

④ 暗門川(あんもんがわ)

岩木川の支川。上流に暗門の滝があることによると思いますが、アンモンの語源は不明です。修験道と関係のある言葉かもしれません。

⑤ 大沢川(おおさわがわ)

岩木川の支川。下流には大沢という集落がありますが、本流の大川に劣らない水量と、流域を持つために大きい沢の意味の大沢でありましょう。

⑥ 相馬川(そうまがわ)

岩木川の支川。相馬村の相馬集落は、岩木川の本流から少し奥に位置しています。ソンマ…あるいは、すぐの意味でしょうか。

⑦ 棚内川(とちないがわ)

岩木川の支川。棚内の棚は、桁でありましょう。桁の実は食料や薬用として生活に密接な係わりがありました。トチナイは桁のある所の意味でしょうか。

⑧ 大秋川(たいあきがわ)

岩木川の支川。この地区岩木川本川流域に「平」が付く地名があります。平は台地、また、この川の「秋」は実りの秋、すなわち、豊かな土地を流れるという意味でしょうか。

⑨ 後長根川(うしろながねがわ)

岩木川の支川。岩木川東斜面、後長根沢が源流です。岩木山神社がある百沢の東尾根の沢、すなわち神社の後の尾根…長根の沢、という意味でしょう。

⑩ 早川(はやかわ)

岩木川から取水して後長根川の下流に合流する川で、ハヤは取水したという意味でしょうか。

また、ハヤスは、切りとることをいいます。

⑪ 大峰川（だいばちがわ）

岩木川の支川。上流の鶏川と血洗川合流点より岩木川までの間をいい、岩木山の山麓の末端を流れます。ダイは台地、バチは端の意味と思います。

⑫ 鶏川（にわとりがわ）

大峰川の上流のひとつで、この川のそばを岩木山参詣のための道が通っています。祭事を行う（ニワ）のために通る道（トオリ）の川の意味かもしれません。

⑬ 多沢川（たざわがわ）

大峰川上流のひとつで、岩木山麓低台地を東流して大峰川に合流します。多沢は水田灌漑の水源となる田沢か、あるいは流域に水田が開かれている田沢の意味でしょうか。

⑭ 前菴川（まえやちがわ）

旧大峰川に合流して岩木川に注ぎます。岩木山東山麓に散在するわき水を集めて流れています。ヤチは、湿地帯や小谷をいい、マエは、弘前から見て岩木山の手前であることからこのように呼んだのかも知れません。

⑮ 大石川（おおいしがわ）

旧大峰川に合流して岩木川に注ぎます。上流の岩木山中腹に大石神社があるためと思います。

⑯ 血洗川（ちらいがわ）

大峰川の上流のひとつで、「血洗川」とはなんと不気味な名前ですが、と殺、あるいは皮革工業と関係のある名でしょうか。

⑰ 平川（ひらかわ）

岩木川の支川。津軽平野南部の中心を流れています。この流域は古くは平賀（ひらか）の郷でした。ヒラは、平地でないし緩傾斜をなしていることをいうのでしょうか。

⑱ 津刈川（つかりがわ）

平川の最上流部分の一支川。多くの沢を集めて深山の中を流れます。ツガルは、ツカルの意で、洪水になりやすい川という意味であるかも知れません。

⑲ 大落前川（おおちくまえがわ）

平川の支川。下流は碓ヶ関村大字大落前、秋田領との境の関所のあるところ。ラクは、連絡のラク、山中あるいは他領に連なる意味でしょうか。マエは関所の川向い。

⑳ 不動川（ふどうがわ）

平川の支川。下流に古懸不動堂があることによります。

㉑ 虹貝川（にじかいがわ）

平川の支川。下流の集落虹貝によります。カイは、峽、溪谷でしょうか。ニジは不明。

㉒ 島田川（しまだがわ）

虹貝川の支川。流域の中心集落は島田、シマダは、川沿いの耕地の意味です。

㉓ ミツ目内川（みつめないがわ）

平川の支川。下流村落は三ツ目内、三ツ目はミズメ、河川の流れの意味でしょうか。

㉔ 折紙川（おりがみがわ）

三ツ目内川の支川。川沿いには折紙という集落があります。上流に大地獄があるので信仰に関係があり、「降り神」の意味であるかも知れません。

㉕ 大和沢川（おおさわがわ）

平川の支川。流域の津軽平野と、秋田県境山地の山麓地帯の接するところにある集落、大和沢によります。大和沢はヤマト…山への入り口の沢という意味でしょう。

㉖ 引座川（ひきざがわ）

平川の支川。遠手川と、浅井川の合流点から平川までの水田地帯を流れる部分をいいます。ヒキは低地、ザは場所でしょうか。低平地を流れる川の意味かも知れません。

㉗ 土淵川（つちぶちがわ）

平川の支川。弘前の市街地中央を流れています。土淵は、両側が土のフチ…崖状をなすとの意味でしょう。

㉘ 腰巻川（こしまきがわ）

誰れが、いつ付けたか分かりませんが、まことにいい名前です。

昔、夏に水田灌漑のため女たちが、ジュバンに腰巻一つで水車を踏んでいた光景から誰が言うともなくそう呼んだ、と推測した人もいたといわれていますが、あるいは、作業で汚れた腰巻を、この川で洗っていた際、水で流されたの

でこの名前になったのかも知れません。

⑳ 浅瀬石川（あせいしがわ）

平川の支川。下流に浅瀬石という集落があります。水の浅い所の意味でしょうか。

㉑ 青荷川（あおにがわ）

浅瀬石川の支川。源流は八甲田山中の高層湿原大田代で、上流に青荷温泉があります。アオは湿原、ニは根の意味でしょうか。また、一説には青荷沢の「ふり仰ぐほどの絶壁を背負った沢」の意味の地名からついたともいわれます。

㉒ 二庄内川（にしょうないがわ）

浅瀬石川の支川。合流地点に二庄内という集落があります。庄園とは関係なく、小園と同じようにひとつのまとまりのある小地域の意味でしょうか。

㉓ 中野川（なかのがわ）

浅瀬石川の支川。川沿いに中野という集落があります。田代山と、黒森山の間にあるやや平らなところという意味でしょうか。

㉔ 高館川（たかだてがわ）

十川の支川。中流村落の高館によります。高館は、台地の末端が平地にのぞむ所をさす地形用語かと思います。

㉕ 浪岡川（なみおかがわ）

十川の支川。古くから流域の中心集落であった浪岡を流れていることから、この名前になったものと思います。

㉖ 正平津川（しょうへいづがわ）

浪岡川の支川。この川の南には、八甲田山群の櫛ヶ峯からの尾根が通っていますが、ヒヨは峰、ヘツは縁、（へり）の意味でしょうか。

㉗ 大釈迦川（だいしゃかがわ）

浪岡川の支川。津軽平野から青森平野にいたる大釈迦峠付近が源流です。大釈迦という地名は、梵珠山頂にあった釈迦堂にちなむといわれます。

㉘ 赤川（あかがわ）

大釈迦川の支川。アカは神聖の意味か、耕地の意味かのどちらかであると思います。

㉙ 旧十川（きゅうとがわ）

新十川放水路の完成で、分断された下流部分を旧十川と称するようになりました。（十川の項参照。）

㉚ 松の木川（まつのきがわ）

旧十川の支川。中流部の集落松野木によります。松野木のマツは台地の末端部分の意味、キは崎あるいは岸の意味でしょうか。

㉛ 飯詰川（いづめがわ）

旧十川の支川。中流部の集落飯詰によります。飯詰は、津軽半島の山足地が岩木川低平地にのぞむところにあります。イイは上を意味し、ツメは端を意味しているのでしょうか。

㉜ 天神川（てんじんがわ）

松野木川に合して旧十川に入る小流です。中流に天押し天満社があることによります。天神は天の神、すなわち水神の性格を持つものと信じられています。

㉝ 大淵川（おおぶちがわ）

飯詰川の支川。オオは尾根、フチは縁で尾根のふちを流れる川の意味でしょう。

㉞ 小田川（おだがわ）

旧十川の支川。金木町大字喜良市の字名に小田川山がありますが、川の名称は、下流嘉瀬から合流地まで低平な湿地で、両側に泥田が開かれていたことによる泥田のオダでしょう。

㉟ 多多良川（たたらがわ）

小田川上流部の支川。タタラは古代製鉄のタタラのあった沢の名によるものでしょうか。

㊱ 金木川（かなぎがわ）

この川は、北からの流れが同町喜良市の手前で西へと変わります。そのことから、金木川の元は“曲川、（かながわ）”で、その曲川に沿った所に“柵、（き）”があったため、“曲柵”（かなぎ）といわれていたが、後になって金木になったといわれています。また、岩木川下流の低平地に位置する新田地帯は、鉄分のカナケで赤色をした水のある湿地が由来ともされています。

㊲ 鳥谷川（とりやがわ）

上流を戈野神川ともいいます。津軽平野北部の東側の灌漑排水を集めながら十三湖に入ります。下流の流路付近は草刈り場、トヤだったことによると思います。

④7 宮野沢川（みやのさわがわ）

鳥谷川の支川。中流にある集落宮野沢によります。宮野沢のミヤは、平地から入りこんだ所のミヤイリの意味で、ノは平地を意味するのでしょうか。

④8 中里川（なかさとがわ）

鳥谷川の支川。鳥谷川水系のほぼ中央に中里があります。中里川と宮野沢川の流域の間は早くから水田の開かれた所です。中里とは、中央ないし中間の集落をさしたものでしょう。

④9 尾別川（おっぺつがわ）

津軽山地から西流して下流尾別の西で鳥谷川に合流します。尾別は先端を意味するオ、山並のベツで、山麓の先端にある集落の意味でしょうか。

⑤0 薄市川（うすいちがわ）

津軽山地から流れ十三湖に入っていますが、川名は下流の集落、薄市によります。

十三湖がこの川の谷深く入っていた時代、この辺は船着場であったといわれています。

ウスは、ウシ…内。イチは海産・陸産の交易の「市」でしょうか。

⑤1 今泉川（いまいずみがわ）

津軽山地から流れ今泉で十三湖に入ります。津軽平野水田地帯の最北端、十三湖に臨む所に今泉の集落があります。新しく開かれた村のイマ・イズミは出るの意味。

⑤2 馬鹿川（ばかがわ）

十三湖近くに久兵衛川という川があります。安政3年（1856）に完成したといわれるこの川は、流れが緩いため、流下能力があまりなく、むしろ常に十三湖の水位に左右されて逆流することが多いため「馬鹿川」と呼ばれるようになったといわれます。

⑤3 石川（いしかわ）

岩木川河口部分の派川で、十三湖に注ぐ延長2kmほどの川です。旧乱流部分のひとつでありましょう。イシカワは、イソ（磯）川の意味でしょうか。

⑤4 西川（にしかわ）

石川の西にあり、三本川から分岐した約5～600mの部分で、石川あるいは岩木川本流の西にあたるからと思われま

す。

⑤5 三本川（さんぼんがわ）

岩木川河口部分の旧乱流水路のひとつで、石川、西川、三本川の順にあります。三本目の放水路の故と思われま

す。

⑤6 山田川（やまだがわ）

水源は岩木山の北側で、津軽平野西側水系の中心となっています。ヤマダは山麓の耕作地という意味です。

⑤7 新山田川（しんやまだがわ）

水源は山田川と同じですが、狄ヶ館ため池の北水門から流れる整備された水路をいいます。

⑤8 出精川（しゅっせいがわ）

岩木川から取水した土淵堰から分かれて、田光沼にいたる江戸時代に造られた人工河川です。出精は出水か、精を出して働くの意味でしょうか。

⑤9 妙堂川（みょうどうがわ）

山田川の支川。源流は岩木山北の廻堰ため池で、近くに鶴田町大字妙堂崎があります。ミョウドウは、ミオー（ため池）、ドウはト所の意味でしょう。

4 岩木川に関するできごと

地域住民を水害から守るため、岩木川の改修事業は大きな役割を果たしています。

しかし、この流域で長い間暮らしてきた人々には、さまざまな事情があり、時には利害が対立して、争いが起きることもありました。

これまでの主なものとして、次のことが上げられます。

1) 十三湖水戸口開削をめぐる争い

岩木川の最後の吐口である水戸口は、古くから閉塞をくり返していました。

十三湖からあふれた水は、一帯を水浸しにして、この地方の住民を苦しめていたのです。

そのため、開削の位置をめぐる上流新田地方の住民と、十三村民との間に争いがありました。

① 本多水戸口開削をめぐる争い（注、本田水戸口としている書もある）

文久2年(1862)、度々の閉塞で、地方住民が難渋しているのを見かねた時の十三町奉行本多軍蔵は、これを開削するについて郡奉行に陳情し、ついには、藩主の許しを得て、掘削地点を十三村の南端浜方面、いわゆる上潟と呼ばれる地点で工事にとりかかるとしたのです。

しかし、もう11月の極寒骨をさすような西風は、大波を巻き起こす季節となっていたので、前途は容易でないと予想されていました。

加えて、十三と利害相反する金木新田地方民の反対がありました。

つまり、十三では、町の繁栄上から、吐口をなるべく南方地点にしようとしたのに反し、金木新田地方民は、放水に便利な北方羽黒崎対岸地点がよいとして対立したのです。

また、十三側では、開削の際、十三湖の水嵩が増し、水勢が強くなったとき一挙に吐口を掘り通して、日本海の波をその勢いで破ろうとしたのに対し、金木側は、そうすると、洪水のため民家が水浸しになるとして本多奉行に対抗しました。

このように、反対論がごうごうとして険悪な状況となっていたが、本多奉行は敢然として初志を貫こうと、甲冑に身を固め、陣太鼓も勇ましく明神宮に祈願して工事にかかりました。

一方、金木側では、代官、重立ち等を押立てて武装してきたので、あわや血の雨を降らせる形勢となりましたが、十三勢に圧されて金木勢が引き工事が進められ、寒風吹きすさぶ中で、悪戦苦闘の末、ようやく翌文久3年(1863)春に完成しました。(参考資料『車力村史』)

② 明治23年の争い

水戸口の開削をめぐる明治23年にも争いがありました。

当時の状況について同年12月17日付けの東奥日報は、「十三湖水戸口の騒動」と題して、次のように報じています。

「過般暴風吹き続き、ために海水うそぶきて砂土押巻き遂に十三湖水戸口の閉塞を来し、去月28日西津軽郡車力、館岡の部落より開疏のため人夫20余名、十三村に詰めかけ其筋の指揮を待つて居たるに、水戸口開疏指定の場所より百数十間を距る南方に当り十三村吏、同村民百余名と共に突然顕われ、十三村利益を図らんと湖口を附ける工事に着手したので関係村長は停止の旨諭示したが聞き入れる色なく種々悪口致し居る処え、十三村長来り上流部落民の不法を責め暫くして十三駐在の警官出張して十三村民を解散せしめたるに十三村長は、解散の理由を警官に詰問し居る中に、合図と共に警官を首め郡吏、車力村長等の止宿所を襲い暴行を働きたり、翌も又郡集し暴行すること前日に同じ、其翌日は風波激しく水戸口開疏に着手成り難ければ無事に過ぎたるも、本月1日午前9時頃より十三村民凡そ2、30名二流の旗を翻し湖口を開疏するを認めしかば郡吏巡查、村長等之を差止めんとし懇諭せしかと暴行を加え、夫れ夫れ負傷せしめたり、之を見て居たる車力館岡部落民数十名、防禦に尽力せしが殴打せられ此数日間の有様は恰も一小戦争の如く到底制止の見込なし。其の首魁の中には随分理非を弁へ居るものありという。」(『中里町誌』)

北側に開削しようとする車力村：館岡村(現木造町)民と、南側にしようとする十三村民の争いでした。

郡の役人や警察官、村長らの制止にもかかわらず暴行に及び、あたかも小戦争のようであったという程、水戸口の閉塞は、この地方の人々にとっては重大な問題であったのです。

2) 私設堤防事件

五所川原市街の下流にある旧三好村(現五所川原市)は、岩木川と十川にはさまれた低地帯で、昔から水害の常襲地帯として、県下でも有名な地域でありました。

この村に生れ育ち、明治22年から、24年まで村長をつとめた小野忠造は、度々の水害に堤防の築造を痛感していました。

明治28年、水害の最も甚だしい三好村及び、隣接する中川村(現五所川原市)、嘉瀬村(現金木町、一部は現五所川原市)、金木村(現・町)の4ヵ村が連合して十川・飯詰川・金木川などの河岸低地へ堤防を築き、水門を設けて水害

を防止しようと、この実現を県に請願する運動を起しました。

主唱者小野忠造は、4ヵ村の村長のほか、292名の賛成を得て、明治28年12月28日に北津軽郡役所を通じて県知事に申請しました。この事業は、地元の負担だけでは実現できないので補助を要請したのです。

ところが、これを知った十川上流域の村々では、下流域に築堤されると、水利上支障があるとして反対しました。反対派の代表は、当時自由党北部分所幹事で、のちに松島村長をつとめた人でしたが、この人は、姥薮・湊・広田・梅田・漆川・太刀打・吹畑・唐笠柳・石岡・五所川原（いずれも現五所川原市）及び、横薮・強巻（いずれも現鶴田町）などの有志百数十名の連名で反対陳情書をつくり、県知事に対し反対運動を行いました。

小野忠造らは、この反対理由は根拠がないものとして、数回にわたり陳情をくり返しましたが、当時青森県の多数政党である自由党の反対という政治的な問題がからみ、県は、回答をずるずるのぼしていました。

このような状況で、はじめは県の補助がなければ、共同で築堤しようと約束していた嘉瀬・中川・金木村の足並みがだんだん乱れてきました。

県の煮え切らない態度に三好村の人たちは、単独で築堤しようと決意しました。

当時はまだ河川堤防取締規則がなかったので、自分の所有地に自分たちの責任で堤防を築くのは違法でないという見解で決行したのです。

明治28年8月末から藻川・鶴ヶ岡の人々が総出動して工事にとりかかり、わずか10日間で1,800間に及ぶ堤防の大部分が造られました。

ところが、この工事中に当時の北津軽郡長は、「官の許可を得ず堤防を築造するのは不都合」として、中止を命じましたが、工事は進み出来上ってしまったのです。

こんどは取こわしを命じ、関係者を郡役所に呼び付け説諭しましたが、三好村の人たちはこれを断固として拒否しました。

結局この堤防は、明治30年県の命によって破壊されたのです。この破壊作業は、青森県警察部長指揮のもと、各署の警察官や、憲兵が村内外一帯に非常線を張った中で行われたと伝えられています。

これが有名な私設堤防事件で、この堤防のことを「小野忠土手」と呼びました。（資料『五所川原市史』新谷雄蔵著、『新津軽風土記、わがふるさと（四）』船水清著（小野忠造のことについては一部別掲）



小野忠土手跡の碑

3) 長泥集落移転騒動

北津軽郡武田村（現中里町）大字長泥集落は、岩木川改修のために移転することになり、大正12年3月、11月、同14年3月の3回にわたり土地買収が行われました。田98町5反歩、畑5反歩、宅地7町5反歩、山林7反歩、原野25町歩、その他1町歩、その代金34万750円は関係者の承諾を得、登記を済ませて代金を支払いました。また、建物は、2,322坪9合で、関係人員は68名でした。その移転は、大正15年3月31日までに完了することとし、移転料は、移転着手後に支払う約束で承諾書へ捺印の手続きを終え、工事を進行しました。

ところが昭和3年3月31日現在で移転した者は、68名中56名で、残存者はわずか12名になっていましたが、農民組合や労働団体の扇動によって、無断で旧宅地に小屋掛けした者が20数名ありました。7月10日に、日本農民組合青森連合会常任幹事武田完治外1名と、関係者10数名、同月31日に青森県一般労働組合書記山田茂三郎及び、関係者代表坂本嘉四吉がそれぞれ岩木川改修事務所に陳情しました。その要旨は、

- 1、耕作権の買収
- 2、職業の保証
- 3、移転地の保証
- 4、移転料の下付（買収前に借家居住していた者に）
- 5、住宅地の保証

このようなことで、金木警察署及び弘前憲兵隊が出動する騒ぎがありました。しかし、その主張は通らず、工事の進行とともに消滅しました。（『中里町誌』）

4) アシガヤ紛争（車力村、中里町）

岩木川下流部の河川敷には良質のカヤが群生しています。このカヤはアシガヤと呼ばれ、屋根ふきや雪囲いなどに使用されていたので高値で売買され、この地方では農産物に次ぐ収入源でした。

このようなことから、刈り取りにからむ河川占用権をめぐる、車力村と中里町の間で紛争が起きたのです。

国は昭和12年、北津軽郡武田村（現中里町）大字田茂木字若緑地内の俗称中島薮約100町歩のうち75町歩を買収して、岩木川拡幅の工事を施工しました。同地は、西津軽郡車力村と陸続きで、その先は渡し舟で武田村と連絡していたところでした。

戦後、愛知県よし加工農業協同組合が、地元の20倍の高値で取り引きすることになりました。そこで、昭和23年

に西津軽郡車力村、稲垣、十三(現北津軽郡市浦村)、館岡(現木造町)の4ヵ村の有志652名が、西新田畜産農業協同組合を設立、同26年に中島地区を放牧地として占有願を県に出しました。そのため、武田岩木川改修堤防保護組合とアシガヤ刈り取りが競願になり、県と、岩木川工事事務所が調停に乗り出しましたが、まとまりませんでした。

同27年6月、国は、両者に対して同地区への立ち入りを禁じました。武田堤防保護組合は、同年10月、国及び西新田畜産農業協同組合に対して「中島地区のアシガヤ刈り取りを妨害してはならない」との仮処分申請を青森地方裁判所に提出、その決定を待って11月28日、刈り取りを始めました。当時の国警本部は、武田側と車力側に特別機動隊を出動させ、警備に当たさせた結果、一応平穏に終わりました。

ところが、同29年9月22日、今度は西新田畜産農業協同組合が、河川管理者である県と武田堤防保護組合を相手に、中島地区のアシガヤ刈り取りの仮処分決定を青森地方裁判所五所川原支部に申請し、その決定を得ました。これに対し、武田側も仮処分決定取り消しを申し立て、県も「同地区の管理を委任されているだけで、訴訟の当事者ではない」と申し立て、車力側は、仮処分執行と同時に本訴も提出して再び紛争に入りました。

11月16日に、武田側が刈り取りを始めたので、翌17日、下車力：砂山部落民らがサイレンを鳴らして集まり、刈り取りの中止を求めて互いに胸ぐらを取り合い、中には、鎌を振り上げる者もありましたが、警察官の取り鎮めでようやく事無きを得ました。一方、県は、河川生物採取取締規定によって刈り取り中止の立札を建て、また、津軽工事事務所は、武田、車力双方の代表者を呼び「国有地のアシガヤ刈り取りは中止させるが、未買収地約20町歩の刈り取りはよろしい」と伝え、双方とも了解して衝突は回避されました。

県の土木部長が上京して建設省と協議した結果、11月21日付をもって、知事から武田堤防保護組合に採取の許可を与え、西新田畜産農業協同組合には不許可としたので、数年来混乱していたこの問題もようやく決着をみました。

今では、生活様式も変わり、アシガヤの利用価値も少なくなったので、この紛争は過ぎし日の語り草となっています。



アシガヤの刈取り(現在)

5) 昭和10年8月洪水

① 西北郡町村長座談会

昭和10年8月に発生した大洪水は、津軽平野を丸のみにしました。その中でも岩木川下流部の惨状は著しく、その実態は現在想像すら出来ないものがあります。

当時、東奥日報社は「青森県水害実記」としてその実態を詳細に記録していました。その中から抜粋した一部が下記の座談会記録です。

岩木川の改修工事は大正7年から始めて、今年で80年を迎えます。当時の関係者の発言は、今進めている事業にも教えられるところが多く、原本のまま紹介します。

西北郡水害對策座談會

八月二十一日より降り出した豪雨は青森縣に未曾有の水害を現出し、西北郡の水田の被害、

時 九月一日午後一時半
場所 五所川原町公會堂
出席者

△北郡側 佐々木 謙、平山爲之助、秋元五所川原署長、菊池五農校長、齋藤五所川原助役、松川縣農檢支所長、廣瀬北郡農會技師、齋藤十木出張所長、長尾角左衛門、木村賢藏、川浪三好、秋田中川、齋藤治川、工藤鶴田、奈良武田、高橋嘉潮、野呂松島各村長、竹浪板柳農會長
△西郡側 山内木造町長、長々川越水、尼野稻垣、菊池出精、小栗山川除、三橋館岡各村長、北澤車方村會議員、葛西精一(柏村)
△本郡側 山田社長、竹内整理部長、相馬五所川原支局長、坂本鯉ヶ澤支局長、安田、高木兩連記者

南郡大塚の家屋流火、死者の續出は最も惨状を極めたのであ

る、本社はこの水害に對し被害地域の入達から切實な思想と對策を聽き應答に恒久策の貴重な資料を得たい考へから、青森、西北、南郡並に南郡方面

北郡南方の水害

原因は平川の堤防決潰 十川の新堤防が排水に邪魔

竹内 それでは西郡の概括的説明を承りましたから今度は北郡に移つて北郡も同じやうな水害の概括的な説明を聞きたいと思ひます、大体に於て十川の新しい堤防から南の方の水害に關して沿川の村長齋藤さんに御説明願ひます

被害を被つたのは左岸沿川、鶴田、梅澤の一部大体二町歩になつて居ります夫から藤崎の平川の決潰によつて南郡畑岡を通り、主として五所川原堤の沿岸に氾濫したのです、その結果板柳、小阿彌、六郷の大部分、鶴田と云ふ状態になつて居りますそれは反逆に於てははつきり分らないが約二千町歩を超えて居る様に聞いて居ります、私は主として十川方面の沿岸に於て大

濟藤氏(沿川村長) 只今の仰せに從つて五所川原の南郡の水害に對して説明申上げます、私はこの度の北郡南郡の水害として、その原因は大體二つに分れて居ります、其一つは十川の堤防が決潰したのと、二つは南郡平川の堤防の決潰の二つでありまして、十川の堤防の決潰によつて

浪岡川との合流點が一番危険であります七年の水害の都合にもその合流點の側所が決潰したのであります、その時と同じ側所が三ヶ所、間敷に於て五十間決潰したのであります、沿川、梅澤、小阿彌、鶴田四ヶ村關係の洪水は十川の方でありまして沿川の堤防が決潰しさへしなれば殆ど洪水と云ふものはなくとも免れると思つて居ります、それから七和の状態に於ては南郡富木箱方面が二ヶ所決潰したのであります、その決潰の關係はその次の野澤と七和、長瀬の方面に波及した様な状態でありまして、先づ大体この度の水害で南郡の方の原因はさう云ふものであります、その決潰したのと此の度十川の改修した堤防が完成して居らず却つてこの製造によつて排水が悪くなり堤防の南郡は多少損害が多くなつたのではないかと見て居ります、將來この堤防が完全に築かれたら殆どどんな水害はない状態となるのではないかと考へて居ります、けれどもこの度の水害の概を見てはこの堤防が高くなつた爲めに水がはける事が出来ず溜つた水のやり所なくこの洪水が非常に長びいた状態でありまして、先づ

の四ヶ所に於て『水害對策座談會』を開催することとなつた、こゝにその一ヶ所たる西北郡の座談會を纏めて収録する

大体南郡の水害の原因としてはその位に見られて居ります竹内 平川の堤防が決潰したのは昭和七年と同じ側所ですか齋藤氏 さうです

竹内 十川の新しい堤防と云ふのは殆ど出て居るのですか齋藤氏 大体出来て居りますが線路とか堰の通つて居るところが未だ出来て居りません

竹内 今度の水害でどの邊が一番ひどかつたんですか齋藤氏 沿川全部、榮が半分、十川の上流が決潰したので小阿彌の一部分、梅澤の大部分、その中永く水浸しとなつたのは梅澤です、之は十川の新しい堤防が出来て水がはけなかつた爲だと思ひます

竹内 それでは鶴田の工藤さん、今の齋藤さんの説明に加へる事がありませんか……

工藤氏(鶴田村長) 何もありませんが只昭和七年の水害當時矢張りあそこ平川が五十間位破壊したのであります

竹内 藤崎の近所で岩木川の水が浸水したのではありませんか工藤氏 その影響が及んだ

五所川原附近

水害の原因

竹内 北郡の中央部五所川原地方

※

は大分やられたらしいですがこの水害の程度について佐々木さんに御説明願ひたいと思ひます佐々木氏 五所川原の水害は鶴田の村長さんや治川の村長さんの云つた様に平川の決壊によると思ひますが十川の決壊による水害も之亦相當の數に上つて居りましてこれらの何が完全に工事か出来て居たならば何等影響はなかつた一五所川原の水害を以て見ると現在改修しつゝある十川の新しい完成とそれから一つは従来の十川の改修であります、改修しつゝある下流の舊十川に對して完全な護岸工事も施さなければこの災害を除くわけには行かないと存じます、この度の水害の勢がつかつたのは大張り藤崎の平川堤防が決壊したのに原因があるのではないかと思ふのであります、昭和七年當時は確か十五間位決壊したやうに聞いて居りますが今回は五十間位やられて居るさうです、昭和七年決壊した當時はその時麻の方では應急策として假工事をして居たのであります、時期を見て更にこれを完全なものに拵へるとの當時の話であつたがそれもそのまゝになつて現在に至つたのであります、それが爲めその當時の假工事が不完全ではなかつたかと思ふのであります、であるからこの度は約五

十間位決壊して水害が多くなつたのだと思ひます、もう一つは聞く所によりますれば改修しつゝある十川の堤防もかさが低い爲めに大分水が越したと聞いて居るが、さうすると將來大張り今一段と高くなる必要があるのではないかと考へられます、今後將來この様に一般に浸水した場合にはその水を除去にはどうしても下流の三好方面の岩木川へ排水する設備をなさねばならぬと考へて居ります、それが出来たら其方面の水害も除かれると思ひます

三好村の慘狀

竹内 こんどの水害で惨狀を極めたのは三好村であります、長尾さんに三好村の今回の水害についてお話し願ひます
長尾角左衛門氏 今の水害の程度について先程二三の方から話された様に平川の決壊は事實であります、それから淺瀬石川横溝其他二三の水流が取入口の水門を閉めなかつた爲め用水路から入つた水も多く、それも原因でありました
竹内 五所川原堤の水門は閉めたんですか
長尾氏 さつき話した様に上が切れて来たさうでこれは致し方もなかつた爲め水害が多くなつたのだと思つて居ります、尚も一つの原因はさかのぼつて岩木川

の改修の設計資料となつた大正七年の雨量は一日の最大雨量は百十二ミリとかなつて居ります、が今度は百八十餘ミリに上つたこれに更に引續き二日目の雨量も相當の雨量で之を前に比較すると三日間に亘つての雨量は二百七十四ミリとなつて居ります、これは何れも上流の方の調べで下の方はそれに比較してまだまだ多くなつて来るのであります、何故かと云へば二百七十四ミリの雨量が川となり流れとなつて下の方に行くまでにはもつと多くなつて行くので實際私等の方としては危険状態になるのであります、そのため二十二日の夜からかなり水の出る事を豫想してゐた私共の村では既に逆水門を閉めてそつちの方の警戒に當つたのであります、そつちの見廻りを済して向ふの堤防へ行つたのは夜中の十一時から十二時までの間で、半鐘を叩いて警戒に當つたが二十三日の午後四時遂に十川の堤防を切らしてつたのであります、一方こつちの方の川からは水がどん／＼あふれてゐるのであります、もし堤防が切れなくても結局は同じ様な結果になつたのではないかと思ひます、十川の方は二日か三日目未だ水が深い内に全滅したので全戸數二百二十戸ある鶴ヶ岡の方は百二、三十戸は浸

水しその他は殆ど床下まで行つて水浸しにならない所は二十戸許りしかありませんでした、然しその二十戸位も全然水がつかないのではなく半分位までは水が来たやうです、それで高瀬の方の水田は水に浸つてゐる期間が相當長かつた様です、先づ全滅と見られ九割九分九厘九毛までやられて昭和七年の水害よりも遙かに大きいと思つて居ります、七年の水害の時には損害が四十萬圓程度であつたが今度は四、五十萬圓程度から六十萬圓程度と見てゐるのであります、何しろ昭和七年の時より二尺五寸も水が高くなつたのであります

竹内 現在はどうですか、田畑なんかはまだ水がありますか……
長尾氏 田の方の被害は殆ど皆無作と思つて居ります、殆ど水をかぶつたもんです、漸く出穂の時を控へて居つた當時です、先づ全滅です、
水攻めになつた
中川村

竹内 中川村の狀態について秋田さんに一つ……
秋田氏 中川村は私の方の村と隣りの三好村は何時でも水害は免れない事になつて有名な水害地であります、今日で(九月一日)恰度十晝夜目であります、まだ稲が水浸しとなつてゐる所は四

十町歩位あります、昭和七年であります、私共の村の全耕地六百町歩の内三百廿町歩が皆無作だつたのであります、この度はそれよりも浸水した箇所が多くなつて居ります、浸水した家屋の床上浸水が三つの部落全部で之まで水に見舞はれた事のない田川、新宮部落の四、五軒も浸水した、それで浸水家屋は二百四十軒位全戸數四百四十九戸の中ざつと六割位の家が床上の浸水を見ました、最も甚しい家に入つたので避難するにも相當苦折つた次第であります、共同作業場、産業組合並役場等二階のある所には皆集つて来て過したやうな状態、昭和七年に比較して非常に慘憺たる状況になつて居ります、恰度二十三日の朝方早く藤崎方面の堤防が決壊して水が入つて来た上、警報から知らせが村に入つたので半鐘を打つて全部の消防手を召集し、そしてその消防手等が堤防を備に罷置き、一生懸命にやつてゐた其時分に飯詰川の用水堰から出て来る水で村の田圃五、六十町歩より浸水して居らなかつたのであります、水かさの上からと下の逆流によつてずん／＼上つて来て二十三日の午後一時頃に

は十川の堤防が二ヶ所一度に決壊した爲めその前後に決壊された上流と下流の間に入つて、消防手や村の人々は逃げ場を失つた始末で對岸の人が舟を出して漕ぎ助けたやうなわけでした、翌二十四日には最早殆ど交通が杜絶してどうしても避難は不可能な有様になつたのです、その爲に飲料水がなくなりそれに食料を送る事も出来ず、船や筏で辛うじて避難民に食料を送る状態、非常に苦勞したわけです

北郡北部の被害
漸く噴止めた金木川堤防
竹内 北郡の北の方金木、武田の一带に關して奈良さんからお話し願ひます……
奈良氏(武田村長) 金木川堤防が決壊したので非常に被害が大きかつた、あそこは駈道になつてゐるのですが、そ奴が危くなつたので警備を打ち附近の消防や青年團が集つて杭一千五百本を以て駈道から岩木川の沿岸へかけて打ち、漸く噴止めた、岩木川の水勢が弱く抑へる事が出来、今度は警備の方から十五尺の杭を借りて来て防ぎました、水田は穂が熟して、穂が出てゐない爲め被害が非常に多く、減水後になつて頭頂やつと弱い穂が伸びてゐるやうで全く實れないと思ひます

は十川の堤防が二ヶ所一度に決壊した爲めその前後に決壊された上流と下流の間に入つて、消防手や村の人々は逃げ場を失つた始末で對岸の人が舟を出して漕ぎ助けたやうなわけでした、翌二十四日には最早殆ど交通が杜絶してどうしても避難は不可能な有様になつたのです、その爲に飲料水がなくなりそれに食料を送る事も出来ず、船や筏で辛うじて避難民に食料を送る状態、非常に苦勞したわけです

役人の更迭が頻繁すぎる

仕事の引継ぎが悪い

長尾氏 二好村の岩木川堤防には明治十八年に作った遊水門があつたのですが岩木川改修の際大久保技師が来て十川をよくすればこの水門は不用になると村の人を説伏し村でもこれ一承諾した——私はその當時村に居らなかつたが歸つて来てこの話を聞き、村の人に諸君は困つた事を承諾してくれた、あの水門がなければ必ず困るときが来ると言つたが、既に承諾後のことであり大久保技師に話したところ、十川改修の結果あの水門が必用ならはその際はその際を作つたら良いぢやないか、こゝは私に任せなさいといふ事でそのまゝになつた——それから今回の水害で感じた事はかゝる水害が来る事を上流から下流の方へ危険状態を知らせる——つまり、今こゝでは何尺増水した、これはそちらへ行くのが何時頃になる、氣をつけろと云ふ具合に知らせぬ情報機関があつた事を痛感しました、それは是非必要であります

平山爲之助氏 私は別にありませんが、今長尾さんから話された事で大体よいと思ひますが、只今後今回の水害に鑑みて改修すべき仕事を擴張して完全なものにして貰ひたいと云ふのが私の希望する處であります、今回の水害は地方的に云ふと藤原の平川の堤防が切れたのが一番原因ではないかと思つて居ります、その當時假工事のやうなものをしてその儘になつて今日に至つたから、その弱い部分が潰潰したのであると思ふのであります、一体それはどう云ふ事からしてさう云ふ風になるかと云ふことは私の推測であります、その當時の當局者の更迭する事が第一の原因でないかと思ふ、つまり前任者の仕事は後任者によく引継がれない傾きがあります、それで青蓮職の如く水害とか冷害の多い所には御役人さんを永く置いてそして責任を持たせて仕事をさせて戴きたいと云ふのが希望であります、外にはありません

竹内 只今の問題で秋田さん……秋田中川村長 どうしても岩木川の改修事業として現在の改修よりもつと上流まで堤防を頭丈に設置し且つ平川、淺瀬石川等の改修もして上流で溢水するやうな事のないやうにしなければ、三好、松島、中川、三好、嘉瀬、金木と云ふ澤山の耕地を救ふ事が出来ない、これに就て今回水害の最も甚しかつた、二好村の川と二人で四、五日前岩木川改修事務所を訪れた處、度々く賊の土木課長等が水害の調査に来られて居つた處へ行き、水害について色々話し合ひ今後どうしても國の事業若しくは賊の事業として徹底的に岩木川改修工事をしてくれるやう願ひした處、これに對して出来るだけの努力をすると思ふ非常に心強いお言葉でした、今までは飯詰川の改修なんか軽くあつたつてあつたが今回のやうな大きな水害にぶつかつて始めて賊にも根本的な治水が必要だと感じて居るらしい

鐵道線路が排水に邪魔

秋元署長 私に一寸話させて下さいませんか……私は治水策として……山の立木を年々伐採して燃料とか木柵に使用する爲に自然立木が不足勝ちとなり川が氾濫するのではないかと思ひます

現在には各河川の改修工事とかその他の治水工事を行つてゐるのであるが矢張り水害があるところ、云ふ事は山に立木が不足したのに原因してゐるのではないかと考へられるのです、又山の中に大きな貯水池を造ると云ふのも水害を防ぐ一つ、豫防策であると思ふのであります、その水源と云ふのも今申在る大穴貯水池のやうに氾濫にのみ利用でなく、もつと理想的な利強なものであつて灌溉用水の場合には勿論であります、水害或は洪水の場合其處に溜つた水を調節して流すやうに又もう一つはそれを利用して發電所にする、さうすれば造る時に費用が澤山かゝつても發電所に利用して其工費を補ふと云ふ事が出来ると思ひます、或は三は鐵道の敷設問題であります、之等も相當考慮してやつて戴かなければ困ると思ひます、一、二をあげますれば現在の五所川原——中里間、津輕鐵道が出来た爲にあの鐵道にさへぎられて松島、榮方面の水田が永く水浸しとなつてゐたものと思ひます、勿論あの堤防には處々に暗渠がありますがあんなに多く水が出た場合はあの程度の暗渠では到底排水が出来ないと、思ふ故に鐵道を敷設するのも堤防を築く様なものであるからそ

の邊の地的關係も相當考慮してやつて貰ひたいと思ふのであります(拍手起る)

竹内 只今北郡の話は相當出ました、十川の問題に就て工藤さん、貴方の方の水害状況を、又十川に關聯した南部の方の話を代表して話して下さい、工藤田村長 大体に長尾さんから話したやうに今回の水害は岩木川の堤防不完全に依るものと思つて居ります

② 川村水門事件

昭和10年8月洪水は、上流藤崎町白子の堤防が切れて下流に大きな被害が発生しました。岩木川左岸については、上流の堤防が破堤したことは別に内水処理（岩木川の洪水で支川に逆流したり、支川の水が岩木川本川に流れなくなり湛水する）の問題の一つとして川村水門の事件が発生しました。現在は、大峰川、新大峰川の放水路の完成と岩木川左岸（保安橋上流）に完成した川村水門等で問題は解決しました。

当時の関係町村長等の座談会記録は、現在進めている岩木川左岸堤防の工事の必要性が伺えます。

新和村民土淵堰水門を破壊？

下流町村狼狽して折衝中

中郡新和町地内の土淵堰水門は同堤防に溢した為新和村附近は大洪水に遭つたので廿五日同村民は此水門を破壊して排水をよくしようとした。關係の農民多数が是れはし他の道具をもつて同水門を破壊せんとしてゐたが、堤防の西郷木造、楠、川原、出精、稲垣各村はこれを破壊されば同地方六千町歩は全滅に顔する。山内木造町長は木造等に至り事情を陳べ又同日午前九時現場に出發し板柳署長等の斡旋で折衝中である。

土淵堰川村制水門を破壊

小友、三和部落で

中郡新和村水害は大宇小友、三和部落の田畑の浸水は二十五日朝に至るも去らず排水の如き難を呈してゐるが此の原因は土淵堰川村制水門がある爲め制水門はコンクリート造の極めて堅牢なもので排水孔が小さく水の流通は極めて遅く水門の上下は六尺以上の差を示してゐる、之が建設以來同村

小友、三和の田畑数度に亘り水害を蒙り、昭和七年洪水の際も今回と同様の浸水にて殆ど全田面積百六十餘町歩皆無作となり免租された。今年は二度目の大洪水に當り村民は極度に憤激し一身を犠牲にして同水門の破壊作業に取組み、戸松其他コンクリート造の排水孔を破壊し放水の便をよくした（寫



眞は破壊された川村制水門

被被害部落民制水門破壊

中郡新和村川村に土淵堰水門に水進る上水排小友、三和部落民が同じ水門の第一を
八月二十三日夜に破壊した。眞實は堰破壊所を爲してる民部落るのみ

堤防や道路の 愛護

平素の心掛が大切

竹内 今回の水害について土木職
業のことが非常に大きく多いと
思ふのでありますが、齋藤土木出
張所長さんにその間の御感想を
承りたい。

齋藤土木出張所長 さつき岩木川
の改修工事に就て色々説明があ
つた様であります。其間に堤防
が低いとか川巾がせまいとかの
お話がありました。私が、私の見る
ところでは堤防の高さや川巾は
さし、飲水量があるやうには考へ
ないけれども、またこれは非常
に金のかゝる仕事でありますの
でなか／＼やり直すことも難し
いのですが、私が行つて見ると
河川の築堤内部に林檎を栽培し
たり、甚しきは田を作つたりし
てゐるために水の流を止める事
になり、水害の際には非常に
に大きい損害を興へる、あれで
はいくら川巾を廣くしても何に
もならない、又堤防も作るとき
二階の法のある良い工合 堤
防であつても、地方の人がその
法先をけつりつて二、三年経
つ、經、ぬに法も何もない上か
らま、すくな堤防になつてしま
つてゐる、あれでは酷い、切れ

るのも無理がない、それでゐて
水が出て一旦堤防が切れたと云
ふ様な場合になると直ぐ土木が
悪いとか工事が悪いとかいふ、
それや仕方がない、道路など
も少し位の破壊箇所はその町、
その部落の協力して直してけれ
る位に、道路でも堤防でもそれ
だけ平生の愛護精神がないとい
けない、それが非常に大切なこ
とだと考へて居ます

秋元孝長 岩木川支流ばかりでは
なく、下流の幹線以外の河川の改
修費といふものは大抵千五百萬
圓、出るといふことだが、今
回の被害を三千二百萬圓とする
と、總計七百萬圓だけ水害の方
が大きいといふことになる、そ
れで治水事業などはもつと大き
い所から見てやつてしまつた方
がよいと思ふ、また水害の情報
については私の方では警察電話
のあるところは警察電話、連絡
をとりました、警察電話のない
ところは役場の電話を利用しま
したが、遺憾ながら松島、三好は
電話の便がなくそのうち交通も
止まつてしまつて、二好村など
はます／＼増水する状態がわか
つて所々それらに注意する方法
がなかつたことは残念でした

災害に對する 訓練が必要

川浪氏(二好村長)

昭和七年の水
よりも今年の水は二尺高かつ
た、村の人はマギ(農家の
物置)のある者はマギへ避難し
たがマギのない者は岩木川の堤
防へ避難しました、馬もつれて
行くので堤防の上はまるで馬市
のやうな賑を呈し悲惨であつた
こゝに二晝夜、三晝夜居りま
たので家財、具なども殆ど感
々々になりました、痛切に感じ
たことはかゝる災害の準備と
して二好村などでは舟を二、三
艘用意しておくことが必要であ
ります、明治三十年頃までは村
にあつたのださうです……それ
で希望することは今回切つた堤
防のところに必ず排水門を作る
ことです、これは今回で二回切
断してゐます二度あることは三
度あると言ひますのでこれは是
非とも作つて貰ひたい……

野田氏(松島村長) 十川が氾濫し
て洪水になるのは屢々の事であ
りますが、屢々浸水し、事がな
いから避難方法なんか考へた
ことはないのです、太刀打、漆
川、石岡方面はひどく急に水が
たので、家財道具や其他の物を
船片付ける暇もないやうな状態
でした、當、筏を作つて各戸に

禁出しを罷給したやうな状態
あります

竹内 五所川原町の助役さんに伺
ひたいのですが、出水當時の救
助や避難状態について御覽しに
なつ、點をどうぞ……

齋藤氏(五所川原町助役) 私の町
として一番ひどい被害は記録の
上では昭和七年水害であります
が、當時の水害の救助して戸數
から考へて見ると當時は四、戸
そこ／＼の戸數であつたが今回
の浸水戸數といふのは一千五百
十二戸と言ふ莫大な數字で町の
約八割が浸水したのであります
から言ふことは一寸考へられな
いことであつたため色々救助の
事についても随分手づ摺つた事
は事實であります、幸にも消防
方面の助力で警備、避難が出来
たので、また、避難から上
げますが知己、親戚を頼つて高
台方面へ避難した、さう云ふ風
な知己、親戚のない者は役場と
か公會堂方面或は男子校、高等
女學校等に避難させました、
五所川原町の浸水、緩慢にゆつ
くり出水になつてだん／＼高ま
つて來、のでありますそれが爲
避難する機会が出来ました、救
助方面については方面委員、そ
の他消防衛生組合役員その他の
人達が十分努力して下さいまし
て一通り整理が出来たのです、

今考へて見るとかう云ふ訓練が
ついてなかつた爲手違ひを來し
たやうに思はれますから今後こ
れ等の方法も良く研究して各別
体に訓練する必要があつたもの
と考へられたのであります、尙も
一つは水道の問題であります

今回の水害で私共が大いに助が
つたのは此の水道であります、
第一に飲料水に心配せず済ん
だし傳染病發生の豫防にも助か
るのであります、若しこれがな
かつたならば何日間と云ふもの
は水も飲まなければ禁出しも
出来ないと云ふ様であつたの
ですがその心配をせずに済んだ
と云ふのは一に此の水道にあつ
たと思ふのであります、然し保
ら若し水道、鐵管等が切れた場
合も考へて見なければなりません
んから將來はこれ等についても
相考考へて見なければならぬ
と考へて居ります

竹内 漢川の村さん、同様の問
題であつたのお考へを……
村賢蔵氏 三好の村にさんが云
つた通り私生の附近は「川の堤
防をより以上高くする事と排水
門の設置が最も必要であります

土淵堰問題 川村整水門の必要

竹内 其次は木造町所謂中央部の水害であります。木造町、柴田村の一部、出穂、川除村の一部の關係ですがこれは土淵堰の關係が多いと思ひます。勿論山田川、中の川、赤川、古田放しその他の排水路の關係もありますが、今回は土淵堰にいろいろの問題があるやうに考へますので土淵堰について管理する田内木造町さんの御説明をききたいと思ふのですが未だお見えにならないので、土淵堰常設委員の葛西様一さんに土淵堰の關係を、今回の木造方面の水害を概括的に、いから……御説明ひます。又土淵堰を如何にすべきかと云ふ事は改めてお話ししたいと思ひます。水害についての概括的な状況をお話願ひたいと思ひます。

葛西様一氏 さうですか……私の仕事の上からして今回の出水について岩木川の水を見ましたが、恰度二十三日午前六時頃から七時までの間の水の話をして……(地圖に向ひ)こゝは藤代、上大川の南はづれで岩木川の水は土淵堰の水より凡そ二尺高かつたそれから上青女子、下青女子間の驛道は一尺五寸位岩木川から

水が溢れて居た、種市學校附近では同じく二尺位岩木川から溢れて居りました。

竹内 岩木川の堤防から越えたのですか。

葛西氏 あの邊は堤防がないのです。岩木川の改修工事は上中畑で終つてゐます。岩木川東側即ち右岸は大性まで堤防があつてそれより上流方は堤防が水を支へて右岸へ溢れず左岸へのみ溢れました。桂柳はこゝでは地圖説明)三尺五寸岩木川から入つた、其水は三種のこゝに集つた、岩木川の水がさう云ふ風に溢れて土淵に入り一方には岩木川から出て来る高杉放し、大石川、大嶺川の水が氾濫地帯を作りその水が水元、柏一面の洪水原因となつた。

竹内 一寸伺ひますが、かう云ふ水害の場合に水路の諸設備に對する處、問題が重要だと考へますが、土淵堰では今回の出水に際し取入口の水門の扉を閉めましたか。

葛西氏 しめたのです、二十二日の午前四時頃雨の降つて居る最中だと思ひます。

竹内 さうすると他は水門はどうしました、たとへば川村の整水門などは……

葛西氏 あとは閉水してしまひました、川村の水門も廿二日夜六、

七時頃と思ひます、開け放しにしました。

竹内 雨の最 降つて居る時ですネそれは……全部開け切りにしたけれども、留置機に水がついたわけですか。

葛西氏 現場に居りませんからどう云ふ風であつたかはつきりわかりませんが開けた當時はあの水門は七尺であつたが水は一尺何寸かになつてゐて、下があいて居りました。

竹内 水がますます出て来るので川村整水門上流の人達がこの水門を破壊して排水路を大きくすべくあの水門の上の方を破壊するに至つた……事がありましたが、それについて状態を經過をお話出来ませんか。

葛西氏 七れだけは何とかして……私は現場に行かないし見せんのでしたから……

竹内 現場に行かない状態でありましたか。

葛西氏 左様です。

竹内 それは出水のためですかそれとも附近村民の騒ぎで物騒で行けなかつたのですか、その邊を明かにした方がよいと思ひますからどうぞ……

葛西氏 二十五日朝あの邊は……いや、この事については何卒それだけは御勘辨願ひます、あとで町長さんもお見えになり

ますから町長さんからどうぞ……

竹内 土淵堰に關する説明をもつと伺ひたいのでありますが小栗山さん、葛西さんの説明を補足して戴けませんか。

小栗山氏(川除村長) 今葛西さんは土淵堰の常設委員である關係から見て大體の態を申した様ですが、この川村整水門の關係で氾濫するといふ地域は大體こゝ(地圖を指す)小友附近であります。そして土淵は御承知の通りこの岩木川のこゝから(藤代村)水を入れてつと、かういふ工合(地圖を指す)に來るのでありますが……葛西常設委員の説明の通り今回のこの新和村附近の浸水は土淵の取入口から水を入れた結果氾濫したのではない、土淵には水を制する處の水門がありこゝを閉めると水は入つて來ない、洪水の虞があると逸早くこゝを閉めるのであつて今日も閉めてある、それから川村整水門と中ノ水門の間には種市にも排水路があり、藤代村、中畑には後流の水を整水する排水門もあります、今回問題の川村整水門については……この水門の上に大嶺川、大石川の兩川が土淵堰に入つて居ますが洪水の最大原因はこの兩川なのであります、

この兩川は水害が相當に多い、大嶺川の水流 どの一分間二千箇の流水量を有してゐる、大石川はそれよりちよつと少いのであります、であるからして中ノ水門以下の水門でよく排水してもそれより下流に於て入つて來る高杉放、中ノ放、大石川、大嶺川の四つによつて川村附近の土淵堰は相當に負擔が大きいのに小友、種市は窪地によつて居るので水害を蒙り易い、しかしこれは土淵堰それ自体の關係といふよりも大嶺川、大石川の關係が大きいのであります、それで川村整水門にはこれらの水と岩木川へ着す排水門を作つて岩木川の水位が低くなるとこれによつて排水するのであります。

竹内 それで一寸伺ひますが種市の排水門が現在岩木川に水を送るに用をなして居ますか。

小栗山氏 種市の排水路は矢張り水して居りますが、この水路もよくないので、新しい水路を通すことになり二萬五千圓の工事をすることになつて今年からかゝるつもりであります。

竹内 川村整水門の排水路は今回相用をなしましたか。

小栗山氏 岩木川が水位が高かつたため却つて逆流するのでこれは閉鎖しましたきり用をなさなかつたんです。

竹内 それではもう一つ伺ひますが、川村の整水門は出水の場合には開けつ放しにすれば下流の洪水を防ぐ用をなさない事になります、また放水門の方は出水の場合には岩木川の水位が高く却つて逆流するやうでは、これも用をなさないといふことになり川村整水門存立必要の所以がうすくなると思はれるのであります……川村整水門は外に重要な役割が必ずあると思ふのです、その點……小栗山さんに御説明願ひます。

小栗山氏 御説の通り開けつ放しの水門となると不要論も出るわけですが、これは出水の際に上流の氾濫を緩めたいといふ人情からさうして居るのであつてこの水門は土淵堰深際の際などには是非必要であります、また放水門は今回出水の最中には用をなさなかつたけれども、岩木川の水は出も早く引けも早いので岩木川の水位が、この水門の水位より高いといふのは極く短い間であつて、後はこの放水門が有効なで決して必要なものではありません。

竹内 それでよく解りました。

新和村の水害と土淵堰について

竹内 小栗山さんに伺ひますが土淵堰の氾濫は土淵堰そのもの、水でなく土淵堰に入つて居る大石川、大蜂川の關係の様に説明を聞きましたが中郡の新和村では土淵堰一帯を氾濫せしめた川村整水門を除去すべくしばしば執拗にその要求を繰り返して居りますがこれに應じなかつたのは土淵堰は西郡にとつて生命線であるからだと思ひます、又一つに川除、植村附近の被害対策についても御説明願ひます

小栗山氏 それではお答へ致します、この度の出水は昭和七年に比較して西郡の土淵堰方面は二尺二寸許り水量が多かつたと思ひます、土淵堰に注がれる處の大石川、大蜂川、高杉放の水量も多かつたのであります、然し乍ら此の度の水害で川村の整水門の上流、小女と新和の水害を最も増大ならしめた原因は上青女子堰の氾濫からである、先刻莫西さんが云つた通り上青女子中輪間は一尺五寸の水量をもつて岩木川から溢水してゐたのであります、それから種市と川村水門の間はこれ亦三尺五寸の深さを以て岩木川から溢水した水が土淵堰に逆流して居りました

岩木川右岸は堤防が出来て居り上青女子も岩木川改修の結果堤防が築かれたが上中畑以南は堤防がない、それで上中畑から上流の岩木川もそれを改修して頑丈な堤防を築いて貰はなければ中郡新和村一帯の水害は救はれぬ、従つて土淵堰の水害も防く事は出来ない、この堤防が築かれれば今回土淵堰に依つて受けた水出四千八百町歩と云ふものは殆ど救はれる事にならう、更に八千町歩の悪水等も相當助かると思つて居ります、而してこれ等の完全を期するにはどうしても川村の水門を完全にしなければならぬ、これは當時農林省と内務省の調査に依つて堰の意見も加へられてあつて設置されたのであります、然るに今では整水門がある爲めにその邊の低い窪地に溢水して非常に水害が多いとかう云ふ風な新和村の意見であります、今まで申述べた様にあの附近一帯の水害は原因が土淵堰にあるのではなく、岩木川上流の河岸が不完全なところから基因してゐるのでありますから、土淵堰の水門の問題よりもその方に力を入れなくてはならないとかう思ふのであります、また一旦水が出ると新和の要求を容れて私等の方では誠意を示して七尺の整水

門を全部開けて下流に水を流してゐるのであります、そして上流の堰水に全力をつくして居ります、あの整水門があるために水勢に多少の落差がつくでせうが整水門そのものゝために水害を受けると云ふ意味にはならぬのであります、これは深く論ずる譯には行きませんから止めて

置きます、要するに土淵堰の川村整水門の問題は、くりかへすまでもなく、中郡新和村が除去を要求するやうな害を興へてゐるものではなく、あの邊の水害原因は全く岩木川改修の徹底と大石川、大蜂川の出水に影響されることが多いのであります



現在の川村水門



岩木川に合流する大蜂川

— 参考文献 —

- 1) 河川総覧各論(岩木川水系) (東北地方建設局 昭和33年)
- 2) 青森県内の直轄河川資料集 (青森工事事務所 昭和61年)
- 3) 東北の河川 (東北地方建設局 昭和62年)
- 4) 津軽の母(岩木川改修50周年記念) (青森工事事務所)
- 5) 河川調書 (青森県 昭和63年4月8日現在)
- 6) 青森県地名大辞典 (角川書店 昭和62年)
- 7) 青森県水害実記(東奥日報社編 昭和10年8月)